

日高山脉

北大山岳部

前書

日高山脈は、我部の創立時代以来、部員に最も親しまれて未だ山脈であり、多くの先輩によつて殆んど
の山頂は登られ、河川も通行せられ、その登攀に因しては部として確固たる自身を有するのである。
かつて「北海道の山岳」なる書が、昭和六年、当時の先輩によつて発刊され、以来廿余年未だ改訂の機
を得なかつたが、昭和廿三年に到り、部報「八号編集」と同時に改訂版の発行が企画されるに到つた。
その編集兼人を組織し、原稿の整理も成つたが、出版経費その他の至極で昭和廿八年以来そのままにな
つていた。

しかし近年多くの新人を迎えるに至り、その大部分が本州の出身であるため、部報の不足を補ひ、併せ
て原稿の散逸を防ぐために、日高山脈の手引として、一時的に本書を編んだ次第である。勿論冬季登山を
加え、かつ北海道全土にわたる「北海道の山岳」に改訂版を正式に発行することは近い将来に於て為され
ねば可らぬ。

我々は現役部員諸子が、この手引を土台にますます日高の山の開拓に努力されんことを期待して止まら
ない。

終りにこの原稿は、橋本、山崎先輩等「北海道の山岳」編集当時の先輩の手によるものであることを附
記しておく。

昭和廿九年九月

目次

まえがき

目次

芽室岳

美生岳

幌尻岳 戸蔭別岳

エサオマン、トツタハツ岳

カムイエクウテカウシ岳

札内岳

ホロシリ岳

イトンナツス岳、滑岩岳

一八二三米峰

コイカクシヨ札内岳

ナオロマツス岳、一八三九米峰

ルベツネ岳、ベテカリ岳

中岳

神威岳 ソエマツ岳

ピリカヌスリ

野塚岳

十勝岳 樂古岳

71 66 66 59 56 43 39 36 35 28 27 25 17 15 8 4 3 2 1

芽室岳

(一七五三・七)

十勝國 地図 湖影

日高山脈の最北部に位するこの山は、南望すると美生、幌尻はもとより、遠くカムイエクワチカウシに至るまで、一望に納めることができるため、北日高の展望台とも云はれ、又十勝側から極く短い日敷で登り得るために、山脈中最も早くから足跡が印されてゐる。おそらく日高全山で最も容易な山である。

登路としては(一)芽室川を溯るもの、(二)パンケ又シ川を溯るものの二つがある。

(一) 芽室川を溯るもの

根室本線、湖影駅より西南に通ずる、十二号道路を行き、芽室川にぶつかつてから、石折し上羽帯小学校に至る。再び石折して芽室川に沿う道に入る。馬車道は相当奥まで入つて居り、道の状態は良い。沢をつめて行くと六六〇米附近の二岐に出る。右手の沢をつめて行く。八五〇米附近から左手の標高尾根にとりつき、昭和廿八年度の測量隊に別分けのあとを追つてゆく。頂上のやや北西寄りに國境校線に

出て頂上に至る。

八五〇米附近から尾根にとりつかずに、沢についでいる道を通つて一五八〇米附近の鞍部に出て頂上に至る。ここは割合に良い道があるから、樂なルートである。

六六〇米附近の合流から左手の沢に入り、更に七五〇米附近の二岐から左に沢をつめて行く。この沢には道はないが、割合樂な沢である。大きは岳稜のある斜面を登つて稜線の下の方ツシユをこいで頂上の北東側出てゐる尾根に達する。

芽室川には川口に良いキヤンパ地が至る所にあるから、六六〇米の二岐附近に泊れば一日で樂に往復出来る。

(二) パンケ又シ川を溯るもの

これは日高側から入るルートで、(一)に較べて非常に日敷もかかり、又道も甘いため、残念ながら記録は見出せない。しかし、パンケ又シ川は歩き易い、明るい沢である。

美生岳

(一九一六・五米)

十勝國 地図 幌尻岳

ピパイ口岳は、遠く十勝平原からぞ、その美しい姿を眺めうるが、その屋根形の山容は、印象的である。

一九二五年に、この頂を経て戸蔭別岳、幌尻岳に至つたのを最初として、今日まで数多くのパーティにより登られ、親しまれてゐる。

ピパイ「川貝又は鳥貝」イは「ある所」ロケ語を強める助字とのことである。

最も普通にとらねる登路として、美生川より美生岳に登り、尾根伝いに南下して、戸蔭別岳、幌尻岳に至り、戸蔭別川を下るものがある。日高側からは千路田川本流を溯行して至ることができ、

五万分の一「幌尻岳」図上、戸蔭別岳とあるのは地形上美生岳と稱すべきで、実際の戸蔭別岳は後に述べるものである。

美生岳頂上附近は地図に誤りがあり、実際には美生岳三角嶺は、國境上にはなく、頂上の西の嶺が、國境との分岐点とばつてゐる。

登路

- 一、芽室——上美生——美生川——美生岳
- 二、金山又は平取——日高村(旧右左府村)——千栄(旧千露呂)——千露露川——美生岳

十勝側の登路

「一」のルート

美生川の中流部は山原が少く、溯行には慰つたよりの傾向がかかる。昔造られた造材のトラツク道路はほとんど荒れ果ててはいるが採しむがら歩くことゝ出来る。

美生岳への最初の登りは、非常に急であるから注意しなげればならない。雪溪の残つてゐる七月中はアイゼンを用意した方がよい。

一日目、根室本線芽室駅に下車し、上美生を経て入る。(この向パスの連絡がある) 上美生より南に下つて美生川を渡つてから道を右に折れて、美生川にそう玄々とした農地を行く。

最興人家より上の図上の小みちは、現在では新に立派な道が、川に沿つてつけられてある。トムラウシ川(美生川三三三米の支流)の橋を渡つて少し行

くと帯広管林署造林事業所がある。

ここまで上美生から約四時間と見ておけば良い、その後はいよいよ川分けらぬに歩道を歩み、地形図に美生川とある沢へソーマクオマツスしの合流点附近で泊る。

二日目、この合流から古い道跡は左岸に渡り、次の小沢の前で、右岸に、そしてすぐ左岸に移つていく。沢の流れは急でなく、たいていの所で渡渉出来るが、テレスの間に急に切迫込んでいて暗い。

こういう薄暗い沢をこの日いっぱい歩くのじと悪くてよい。六二〇米のあたりに御影石の中広い滝があり、向をむく又滝に出合う。この滝の下には岩穴があつて泊れるようになつてゐる。(二時間)六〇〇米の支流は水量略本流に等しく頼をばして合している。(約四時間)

旧道はここで終つてゐる。ここからしばらくの間滝は迫つてゐるが、水も少くむり歩き易い、地廻り尾岳の最初の二岐へ實際は三岐である。約二時間かかる。

ここから沢は開けて泊り場に困らぬ。三岐から最後の水線二岐は一時間半程でつく。これより上流

にはよい泊り場がむりから、この辺りで泊るのが良い。

三日目、右の天即ち口境鞍部より発する水線の沢を一キロ程進むと小さな滝がかり、傾斜を急にはつて来る。一〇〇〇米附近の二岐からは、頭上に美生岳の全姿が仰がれる。

ここで雪溪その其のつづき奥合から登るべき沢をよく見ておくことだ。右岸より落ちるその沢をとつて愈々最後の登りにかかる。初めはまだそれほど急でないが、段々傾斜がまして来る。七月中旬ならば一三〇〇米附近から雪溪がつづく。雪溪を登りつめ、急はちお花壺に出て屋根型の頂上の一角に出る。キヤンスから約五時間かかる。雪溪では滑り落ちぬように注意し、あぶつかつたら、アンカイレンした方がよい。又落石にも警戒しなればならない。この雪溪を降りるのに自身がむかつたら、チロロ川の深流に一たん降り國境尾根の低い所をこえて美生川にぞどるも良い。

これより戸蔭別岳に向うのには、國境一を四〇米峰との鞍部まで下つて、その平地に露営するのがよい。

日高剣の登路

「二」のルート

チロロ川を溯行して美生岳に登るのは、本流を登りつめて七〇〇米の水線支流（ポンチロロ川）に入り、美生岳と一七四〇米峰の鞍部に出たから頂上に達するものであつて、チロロ川は下流の一部を除いては、河相は平明で兎持の良い沢歩きを樂しむことができよう。

尚チロロ川下流の一支流、パンケユクトラシナイ沢から額平川へ越すこともしはしは行はれてゐる。一日目、根室本線金山駅下車、更にバスで二時間呂冠を経て日高村（旧石左府村）に至る。日高線平取駅からバスへの便がある。

ここから沙流川に召い干柴へ旧干呂露へ送約十軒、三時間を要する。バス連絡の時間によつて右左府へ或ひは干柴まで歩いてとまる。造材のトラックに使乘すると都合がよい。干柴で沙流川は支流チロロ川を氷生している。

二日目、干柴から本流に別れてチロロ川に召い、山あいの崩墜地を三時間でパンケユクトラシナイ沢

（地図、幌尻岳パンケとあるは誤り）着、この天には造材が行はれ、辰本木材会社の事業所がある。

額平川へと越えるにはこの沢を入るとよいのである。右岸よりの水線の小沢を溯り、八百米の鞍部を経て途中一泊で額平川本流に至る。尚本流の道を行くと約三十分で最奥人家、幌尻岳の地図に入つて最初に川の大きく左に曲がる所である。

道はたゞち細くなり、左岸のテレスをにどつてゐる。人家から約二時間半と云うものは、この踏あとを見失はぬ様に歩いて、左岸からかなり小沢が入つたところで沢に登る。どうしようとひびいてした危状の流れが現れる。踏わけはここで消えてゐる。再び川の東をめざして回流する所であつて、時間に餘裕があると対岸にわたつてしまつと良いが、徒渉するところが滝の上半の一部に制限され、増水時には相當の注意が必要である。おじやかほ中流にひきかえ、この辺で、チロロ川はうがたれた低い函の中を奔騰してゐる。しかしテレスがあるから左右両岸どちらかの熊笹をひらいてキャンヌ地とする。

三日目、函の断続する沢を石岸、左岸と適当にえらんで溯行する。やがて港から四時間位で、沢はひらけ、玉石の上をにんと流れるようになる。せせから約三時間二岐沢との合流處に達する。この辺りは良いキヤンプ地にめぐまじ、合流には砂州もありとまるには良いところである。

四日目、これより上流に南して五万分の一の幅「梶尾岳」には、かなり正確があり、以下明らかと誤と認められるところを訂正してゆく。約二時間で石岸よりの木線の沢が入る。その上手に記された函状地形は存在しない。両岸はひらけて、タンネの低いテレスと中洲が発達して樂に歩ける。

前記の沢出会で右転した川が、再び左に曲がる辺りから川底は緑色の一枚岩のナメが続き、主にその石岩伝いに歩く。三時間半にて左岸一八五三米からの木線の沢が入る。廻々函があるが皆樂にまける。図上その下手に合流する一八七五。之木へチロロ岳から出ている標高尾根西に記された水線の沢は存せず。この沢に相当するのは、チロロ岳の東鞍部から発する水線の沢と三岐をばして合流して居り、なつて標高尾根を、この方向にのみているぞ。と思

われる。

この面側の沢よりチロロ岳に登ることができ、三岐より約一時間でハイロ岳から発する水線の沢（ホンチロロ川）が入つて来る。附近は密生したタネの森でうすくらしい。これより更に本流を行くのはルートとしてその意味がうすい。

ホンチロロ川溯行一時間にして沢はひらけて二岐をはずす。この下手約四百米には滝があつて附証は豪壯でかつ、うるはしい。今日は相当強行であるが、できなほこの附近まで歩いて泊り場を見付けたいのである。

五日目、この二岐から沢は急激ににかまり、標高千三百米位からは小滝が始るが、約六時間主流主流とえらんで行けば、比較的樂にお花鳥を踏むことができるであろう。このようにして美生岳と一四四〇米の鞍部に泊り、ここから美生岳に往復する。（約二時間半）。帰りは美生川に降るのも良いが、戸寫別岳、梶尾岳を登つてから山を降るのが良いだろう。美生岳より戸寫別山へ尾根歩き

前記の鞍部から戸寫別岳の泊り場まで丁度一日行程である。この間道松をばけしくびく、ふみ跡もあ

つて、そよ風にかかたてやせ尾根を歩くのは楽しいものだ。

七月中旬頃は、尾根直くまで残雪もあり、水には困らぬ。戸蔦別川を下るの頃は、泊り場は戸蔦別川源頭のカール、エサオマン戸蔦別岳を並はせうと云うの頃は、新冠川源流の沼のカール、(七ツの沼)にすると良い。

露管地より一九四〇米峰まで約二時間、そこから北戸蔦別岳の岩尾根まで約四時間半で行ける。戸蔦別岳までは、丘下に杉のよい二、三のカールを見下して赤褐色の岩塔の上を歩き、約一時間にして頂上につく。

七ツの沼、戸蔦別岳北面のカールとをに一時間以内にかール底に降ることが出来る。

幌尻岳

(二〇五二・四米) 地図 幌尻岳

戸蔦別岳

(一九六〇米) 地図 幌尻岳

幌尻岳

幌尻岳は、日高山脈に於ける最高峯であり、新冠川、並びに額平川の源頭に聳え立つ雄大な山容は、

吾郷難いものである。

周囲に多くの圈谷を有し、中で北戸蔦別との間の、七ツの沼を尖らせて静りかえる圈谷は、露管地として最適である。

我々はここを七ツ沼のカールと稱し、ゆでているが一歩訪ねてみるだけの価値は充分ある所である。

水口は即ち「大きい」シリは「山」はる意味で、アイ又文字上非常に大切の意味のある山名で、かつてある時代には、附近のアイ又の崇拜の的となつたことのあるといわれる。

登路としては、戸蔦別川より戸蔦別川を経て至るものが普通である。又額平川より幌尻岳に至り、新冠川に降りエサオマントツタツ岳を経て、カムイエクラチカウシ山に登り札内川を下るルートも少しは用いられている。

新冠川の支流スィラルベツ川を溯行して幌尻岳に至り、戸蔦別岳、北戸蔦別岳(戸蔦別岳北方の尾根分岐)に当る一九二〇米の溜りに登り干露沼川を下つても良いし、又更に美生岳へと尾根を歩き、美生川に帰路をとる事も出来る。

もちろん戸蔦別川を下るのが一番容易である。

ホロシリ岳なる山名は、札内岳図上にもあるから
これを日高幌尻岳と呼び、後者を十勝幌尻岳として
區別する。

戸蔦別岳

戸蔦別川の交当りに聳立し、幌尻岳え続く尾根を
分岐している。戸蔦別川に面して園谷を三つ程抱き
幌尻岳との長い鞍部には、大きなカールを二つひろ
けてゐる。幌尻岳に近いので、これのみを単独に登
るより、むしろ両者を含めて計画されることが多い
。戸蔦別川を溯れば、三日にして達し得て、登路も
雖しいものではない。その他美生岳よりの尾根伝い
のルート、千路呂川より登るもの、額平川より幌尻
岳を經て至るもの、新冠川より来るもの等、色々
あけられる。

戸蔦別岳とエサオマントツタベツ岳へ一九〇一
年の間の園焼山稜は、高きが一五〇〇米まで下る
故、腰松、その他の蘆不類の養生甚しく、その一部
は未だ何人も歩いていない。エサオマントツタベツ
岳へ行くのには、一たん新冠川兼流に下つてから登
り直すのが良い。

登路

一、八千代―戸蔦別川―戸蔦別岳―幌尻岳
二、芽室―美生川―美生岳―戸蔦別岳―幌尻岳

三、金山又は平取―千路呂川―北戸蔦別岳―戸蔦別

岳―幌尻岳

四、平取―額平川―額平川―幌尻岳―戸蔦別岳

五、平取―額平川―宿主別川―ファイラルベツ川―幌

尻岳―戸蔦別岳

十勝側の登路

ルートの

戸蔦別川は上流まで広い河原に恵まれ、更に近年
造材のために立派な道路がかなり築きついたので
日高の山に初めて入る人にすすめられるルートの一
つである。

一日目、帯広より十勝鉄道に乗り八千代駅に下車、
戸蔦別川沿いの馬車道を歩いてピリカパタ又沢合流
卓の製材工場に着く。約四時間。
ここに泊めてもらうと良い。尚宿舎については帯広
本名木材会社に向合せらねたい。

二日目、造材の道路を伝い更に右岸の道エサオマ
ントツタベツ川出合に至る。約四時間である。

途中石岸の標高尾根西側の沢は、地図と多少異なる。こねより沢歩きとほり極めて歩き易い河原を坦々と進む。程良い時間を見計り地図の切目附近にキヤンブする。

三日目、三時間ほど溯ると一〇五〇米の木稜の曇るあたりで三方より沢が合流し三岐をなす。

ここまでは、途中二、三の滝があるが、たやすき通廻しつる。この三岐より上は沢の中に泊れぬ。ここから分れる三つの沢については

一、左の沢は登路として意味がほい。

二、中央の沢には途中三つの滝があり、何れもまぐことにより通廻、沢をつめると、左岸に不発。全はカール状地形が展開するが、キヤンブに適さず、戸萬別岳東南の鞍部を越えて七つ沼のカールに下る。このカール底から幌尻岳へは、往復二時間程だが此の日のうちには無理である。

三、右側の沢も容易であつて初めは北西に向つて登り、後左折して西方に向つて居り地図とやや異なる。かほり登つてから沢は、奥に三つにわかれ一番左の側をこねは最も容易である。

こねは戸萬別岳東北面のカールに至るものであ

るがこの北にもカールが存在し、何れも露骨に露している。

四日目、幌尻岳へ、七つの沼のカールからは一九二〇米の滝からカール底にのびている急な尾根を登るがよい。

又戸萬別岳東北のカールからは、尾根伝いに約二時間て頂上に達し得る。

帰途は往路を降るのまよいが、一旦新冠川に下り再び、エサオマン戸萬別岳に登つてからエサオマントツダベツ川が、札内川に降るルートが良くとらわてゐる。ここで尾根を伝はず新冠川に降るわけは、戸萬別、エサオマン戸萬別の両岳をつむぐ國境稜線がひどく遺松や樺木におほはれていて歩くのがむづかしいにゆゑである。

「ニ」のルート

美生岳への登路「一」によつて美生岳に登り更に國境尾根を南下して幌尻岳に至るもので戸萬別岳迄の尾根に就いては美生岳「美生岳より戸萬別岳へ尾根歩き」の項を参照されたい。

戸萬別岳から幌尻岳へは岩の多い尾根を約三時間で達する。この間、脚下に残雪をせいて横にはる新冠

川、額平川源頭の三つのカールの跡は印象的である。

日高側の登路

「三」のルート

美生岳への登路「二」のルートに従つて千露呂川を溯り、三日目本流と分れて二岐沢に入る。

二岐沢の図上の函状地形は存存し、沢に入つて四時向程で八二〇米の二岐に達する。入口は少し暗い感じを与えるが、溯行は容易な沢である。

その下流の石岸からの水線の沢は分明らしい。

ここから主流は、どの沢をつめても大きな滝にぶつかり石の支流をつめて一八〇七、九米峯へ又カピラ山へ出るのが最も良い。

この沢に入ると石は大きくなり、傾斜は増すが溯行は尚も楽である。三十分位歩いて平地を見付けてとまる。あまり歩くと宿り場がひくまる。

四日目、約一時間で小滝が連続してかかる。水量は少く、こねを登り切るとやがて西岸に草付が

現れ、滝が始つてから三時向小ひる二岐をはずとこつて左をとる。やがて木はかた茶色のかしがひろがらう。地図で標高尾根西側流土の印あるところ。七月

中旬はらは、雪溪でおほはれていよう。

かしを登りやがて尾根にとりついて、一時間・一八〇七、九米峯上に立つ。國境尾根には約一時間で達するが、尾根は道松が多く、お花島は断続している。

此の日は少し強行だが、北戸萬別岳東側のカールに下つてキヤンスするのが良いだろう。

五日目、北戸萬別岳から幌尻岳までの、國境山陵は美生岳、美生岳より戸萬別岳へ尾根歩きし及び「二」のルートを讀まねたし。

「四」のルート

額平岳より、幌尻岳へ至るルートは、幌尻岳へ登る日高側の登路としてはそつと普通なものである。更に頂上より戸萬別川に下るか、或いは新冠川上流を経てエワオマン戸萬別岳に登るコースはよくとられていよう。

額平川の比較的平易な歩きの後幌尻岳、戸萬別岳のカールを巡つて次々と露営を進める山旅は興味深いものである。

一日目、日高線富山駅に下車、笹材や鉦山のトラツクが宿主別川、又はペンケイワナイ川の少し上流の額平鉦山事務所まで通つているので、頼んで乗せて

きらつと便利である。

地図の切目附近で一泊することになる。人家は大抵この辺までである。

二日目、道は石岸沿りにつづいており、約三時向にして地図上のパンケユクルペシユバ決しと記入ある本線の沢が本流と合する處に至る。この沢は千路呂川より額平川に乗越す時取らねるルートである。さらに二時向にして次の石岸よりの本線二岐に至る。この附近は流木も多し露営地によい。

三日目、本流は標高五二〇米附近より、兩岸は屏立して函をなし、七四〇米附近まで約四軒の向続く。その通過には約三時向を要し、函の向には、露営地はけいから時向の都合如何では手前で泊らねはならぬ。函は全部中を通過出来るが、増水時には腰迄も水につかつて歩かねはならぬ。其の後は至つて容易な歩行が続くが、独立標高一四三五米よりの沢出合より、一〇〇〇米附近まで約六時向を要する。これより上流には露営に適する所がけい。

四日目、野営地を出てしはらく進むと北戸蔦別岳が丘に見え始め、七月中旬ならば、一一〇〇米附近より雪溪が現われ、約一時間にして第一の滝に至る。

次いで第二の滝。傾斜も石を絡む。相當に大きき滝で十数米の懸崖をほしてかかり、雪溪の下をのぞくと、遙か下に白く泡立つた滝壺が見える。だが最後の二岐が雪溪の上に二つの滝とほつて落ちてゐる。地奥に出る。

右をとつて階段状の滝をのほれば、約二時向でカールボトネンに着くことが出来る。そこは今までの滝の連続とは打つて受つた處かさで、高山植物の乱れ散く中を雪溪からしたたり落ちた木がちよろちよると流れるばかりである。

たき木は少しが露営に適している。梟尻岳頂上へは堆石の上を伝つて約一時間半で達する。更に七ツの沼のカールえ下るには、沼を見下す梟尻岳の東の肩から一矢にカールボトネンに降るのが早く、又一旦戸蔦別岳との最低鞍部に下り、更にお花島の急傾斜面をつたつて沼伴に降り立つのも良い。一時間半の下りである。「一」のルートの三、四の頂を参照せよ。

註①

「額平越え」

根室本線金山駅より千米（旧千鶴呂）に至り鶴平川

本流を越えるルートがこぼである。

首つよくこのルートが用いられてしたが、昨今は鶴

平川の下流が非常に開けたので、前述の「四」のル

ートが普通にとらざるようになった。

千鶴呂川の支流ハンクエクトラミナイ川に入つて

右岸よりの木線の小沢を朔り、八〇〇米の鞍部を経

て鶴平川へと越える。本流に出るには途中、沼を要

し、千鶴呂より一日半の行程である。

「五」のルート

一日目、旧鶴平取駅から蟹屋別を径て宿舎別川

に入り川沼いの踏あとによりシユンバツの沢との合

流附近まで歩いてキヤンヌする。鶴平鉱山事務所

行くトラツクが、宿舎別川上流を越え鶴平川の上流

まで入つて居り又、七五〇米の鞍部を越え別川に

てよいが入るに当つては一派雄ぬるがよい。

尚この宿舎別川はイハクナツメ岳のルートとし

てき歩かなくては、即ち宿舎別川本流をつめて、木

線二岐の庄の沢を朔り、八〇五米の南の鞍部より、

新野川に下るとのであるが、乗越しには一日を要す

る。新野川水深〇、五米の地点より、シラレルカニ

ユベ沢合流迄約二時間半を要す、イハクナツメ岳の

登頂路「三」参照

二日目、新野川を越すには此のシユンバツノ沢を入

つて「沢」の事務所で合流する左岸からの沢をとり

、九四〇米の鞍部の鞍部を越すがよい。シユン別の

沢合流から新野川まで一日を要する。はほシユン

バツノ沢をそつと興まで入つて、独立標高九五四、

二米の北方鞍部から又カニライノ沢を徑てまよいが

時間的には殆んど同じと見てよい。

三日目、不レカニノ沢合流からは、又カニライノ

沢まで約一時間半を要する。

地図の上では又カニライノ沢はオサズイラルベツ川

と合してから、新野本流に注いでいるが、実際には

両沢別々に本流に流れて入っている。本流は此の合流

から上は相当の幅をほしている。

オサズイラルに入れば一時間半で三股とつたうすべ

り流に出あう。地図にて最初の川の曲り目である。

此の日はこれより三時間半歩き、一三三三米からの

沢との合流附近にキヤンヌする。

四日目、ここからは小沢が豊くはつて来る。

河床は水蝕作用の少し赤褐色の石が多く荒涼としてゐるが沢は順調に歩きうる。

地図の上最初の左岸に流れて込む水線の沢との二岐の手前に大きな三段の滝がある。石岸をまくがこまごま約七時向を要する。二岐の台地にキャンパス地を求め、左岸からの沢は一丈上ると滝にはつてゐる。

五日目、二岐からは約十分で滝があり右岸をまく。再び三時向程で大きな滝にぶつかると。一二〇〇米の等高線との交点附近である。この滝の石岸を通過し一時向程で二岐となるが、七月中は雪が現れ再び最後の二岐を徑て約四時向で幌尻岳頂上に達する。

雪溪が切れてからはかなりスツシユをこがねはならぬ。この日は頂上北側のカールに下つて露営するが時間があればセツの沼のカールで泊るのがよい。少し強行であるから朝は早く発つた方がよい。

幌尻岳よりエサオマン戸鷲別岳へ

エサオマン戸鷲別岳へは幌尻岳セツ沼のカールから一旦新冠川一〇〇米の合流處に下り、そこから乗えの支流を登りつめて産するルートが興味深い。エサオマントツタベツ岳まで二日行程である。

十一日、此の日はセツ沼のカールを出ると一〇〇米の二岐までが樂び一日行程である。

カール底を出ればなると、小滝があり、カールから一時向程で再び滝が現れる。ここは左岸から小滝を登りして小沢が入つてゐる。この合流からしばらくの向は流はゆるやかに流れてゐるが、カールから約三時向で滝に始まる相当の函に達する。滝を左岸にからんで下りて函の中を抜く。増水時には石岸を高くまくのがよい。

沢石は赤褐色を呈し荒々しい感を与える。この函は約一時向半つづき、やがて石岸からの大滝をつけて落ちる幌尻岳のカールに発する沢に終つてゐる。これから沢は幾分向きをかえる。

沢には大石が多く流は激しい。ここから合流までは左右兩岸から二、三の小沢が滝を登りして流れて落ちる。石岸からの沢が落ち函から約三時向で合流に産する。合流の手前で沢は巨石が兩岸をふさいでひくい函状となつてゐる。この合流は小さは中州をこつてゐるのが目印となり、良いキャンパス地である。

十二日、左岸からの沢を相行する。この沢はエサオマン戸鷲別岳北面のカールに発するもので昨日に比

して、沢はいくぶん小いし、大石も少く穏かほ感じ
を与える。やがて小さは函状地形が断続するが、何
れぞ中を通れる容易ほそので沢を小さい大石が小
滝をつくつていとところまでつづく。

合流から約二時間て沢は二岐をひす。左のは神威岳
（一七七一米）から来るもので右の沢をとる。

二岐から一時間程で沢は左に方向を變え、左岸から
滝をひした小沢が入り沢は一時せほする。曲り目は
細い滝となり、左岸は急な草付で右岸をからむのが
良い。この滝をこすと沢には再び川原が現れて歩き
易い。時期によつて異なるが、滝から二時間位で水は
涸れるものと見てよい。晴れて居ればカールラアン
トの景観が展開する。主流主流とよつて行けばやが
て沢は灌木の間に夢岐し、カールポーンのお花畑
に達し得る。此の際左に寄らぬ様注意が望ましい。
このカールの中央のモレインの丘に泊まるのを良
いが時間によつてはエサオマン東面のカールに歩を
のはすのそよい。カール中央の急斜面をおおうお花
畑をつたつて國境をは容易に出られる。
今はるはるとやつて来た新冠の溪谷の伎方に戸蔭別
岳、幌尻岳の連嶺が浮んで来るのを眺めながら花の

の褥を登るのは快い。エサオマン戸蔭別岳頂上まで
一時間。東カールえはエサオマン寄りには危険であり
札内岳えの尾根と國境が分れるあたりから下るのが
容易である。

エサオマントツタヤツ岳

（一七〇一米）

十勝・日高國境 地図 札内岳

國境線上において、札内岳への分岐点よりやや北
方に位する独立標高がこれである。

エサオマントツタヤツ川に向ひ典型的な圈谷を抱き
新冠山に向つてを、北西に細長い立派な圈谷を開い
てける。

エサオマントツタヤツ川よりの登路をさへは、三日
行程にて至ることが出来ぬ。これより國境尾根を伝ひ
カムイエクウチカウシ山に向ひ、札内川を下るのは
、最も多くの人々によつて歩かれてける縦走路であ
る。又日高側寄りの登路として、幌尻岳より新冠山
に下り、北西より頂上に達することしばしば行は
れてける。

札内岳より尾根伝いに、或いは札内川本流よりの登路がある。

登路

- 一、八千代―戸蔭別川―エサオマントツタヤツ川―エサオマントツタヤツ岳
- 二、幌尻岳―新冠山上流―エサオマントツタヤツ岳

五

十勝側の登路

「一」のルート

八千代より戸蔭別川に沿い、戸蔭別岳、幌尻岳の頂「一」のルート「二」目のエサオマントツタヤツ川合流に至る。合流より約一杆にて滝に至り左岸をまく、ここから暫くの間は両岸は迫つてゐるが大したことない。決は河原の間を流れてはよどみ、美しい淵を作つてゐる。合流より時間半で八三六米の二岐につく。適当なキャンプ地を見付けながら進む。

三日目、前日の八三六米二岐より上二岐へ一〇のしまで二時間半、この附近に到ればエサオマントツタヤツ岳及び、そのカール壁は眼前に仰がれる。ほぼこれより上流カール迄まではキャンプに適する

と二岐は可也。七時半まで五時、一二五〇米附近より雪渓があらはれ、二時間程で一四〇〇米の滝に出る。天はここから滝とほり瀬とほり、高さはぐんぐんほかどる。小氷が多数落ちこんで来る。約一時間登つて小氷は滝を越すとカールボトンに出る。お花島と岩とのまじつたカール壁を見上げつつ進むのはこの上をばり喜びである。國境を南に伝うのは、このカールに右つた方がよいと思う。

日高幌尻岳へ行こうと思ふのは、この日にエサオマンに登つて北のカールに降つて知るのが良い。最左端の大きな雪渓に登り、途中より尾根にとりついてカールワンドを登る。一時間半である。ルックをテボ―して一時間でエサオマントツタヤツ岳へ往復出来る。カールを下る際は、少し札内岳えよつてから尾根を伝つて下りるとよい。

カムイエクワチカウシ山の縦走

國境の此の部分は最も楽しい尾根歩きの出来るところである。エサオマントツタヤツ岳を誇し南え國境尾根をエクラチカウシに向えば、石は新冠川、左は札内川が遙か下方に白い河原をひろげて望まれば、次の音が微かに既に乘つて聞えて来る。道松は相当

に發生してはいるが、十勝側のお花鳥の回をぬう熊のふみあとをたどれば樂に歩くことが出来る。エサオマンのカールを明出せば、少し早いが地図の切目当りで泊るのが適當で、水も東側の札内川に二十分ほど下れば得られる。札内岳への分岐より約三時間。

翌日は約四十分松の斜面を登り、イドゥンチツスに続く尾根の分岐点に出る。札内川支流の沢上流の滝一カ所の米には三時間程で至る。この東北斜面は、緩斜面で、相当の残雪と平地があり、露営に適する。沢の沢のカールに下りるには、これより暫く南に歩み、カールの中央に張り出している尾根を下ればよい。

約一時間である。カムイエクウチカウシ山に登るには、このカールより、往復約四時間である。尾根は滑せて岩が露出し、蘆松の上を伝つて愉快な歩行がたのしめる。八の天側の斜面は咲き乱れる高山植物にびっしり被はれていて思はず腰を落ち着けにくくなるであらう。

日高側の登路

「ニ」のルート

日高側より登るときは、長大な新冠川を下流より

溯行することは行はず、幌尻岳より新冠川に下りその上流の二岐に一泊し二岐の右の沢を上流に向い、エサオマントツタヤツ岳北側のカールに出る登路が送はれてゐる。

幌尻岳の頂を参照されたい。この道コースは、エサオマンより新冠川に下る際には、登る折には何となく登られるが、降りには歩きにくく、逆戸の草付きをまるところが一ヶ所ある故、注意せねばならぬ。

カムイエクウチカウシ山

(一九七九・四米) 行

十勝・日高國境 地図 札内川上流

前述のエサオマントツタヤツ岳、札内岳と共に、北部日高山脈に於ける重要は一区域を作り、比較的早くより多くの人々によつて登られてゐる。

一九二八年七月、慶応山岳部の人達によつて登られたのを最初とし、その後多くの人々がその頂を訪れて居る。

日高山脈の二の高峯で、そのどつしりと腰をすえたる山容は、この山脈中随一であり、殊にその北面は

立派である。鐘嶺の中心に立つこの山頂は、展望台の如き観をばし周囲の眺望は兎爭ひそのである。之の沢、凡の沢、コイボク等沢頭のカーン群がこれと取巻いてゐる。

登路としては、札内川の凡の沢又はたの沢よりのものと、国境を北より至るものが最も普通である。その他シユンベツ川、コイボクシユシビチヤリ川等も登れるが、これ等曰高側の沢は長し上に、思場が多く、一般的では無い。国境を南より伝うものは、敷のため苦しまねはむらぬ。

登路

- 一、中札内―札内川―凡の沢又はたの沢―エクラチカラ山
- 二、八千代―戸蔭別川―エサオマントツタベツ―エクラチカラ山
- 三、本桐―メナシヤツ川―コイボクシユシビチヤリ川―エクラチカラ山
- 四、静内―シユンベツ川―上アスカウシヤ沢―アスペナイ沢―再びシユンベツ川―ベツピリガイ沢又は本流湖行―エクラチカラ山

十勝側の登路

「一」のルート

このルートはカムイエクラチカラ山に登るためには最もソルマルはそのので、札内側はその名の「乾きたる川」に於る意味の如く、広い河原が七の沢附近までさうな続き、近年林道のコイカク―札内川合流までつけられるに及び、益々らくに歩かれるようになった。曰高山脈に涼を免する較多くの河川のうち最も美しい沢と云つても祖言でなく、国境線への登降には昔から較多くのパーテイによつて利用され、沢の状態をよく判明してゐる。

夏の日照に白く輝く河原の石をピヨイピヨイ飛び歩くときは、肩の重荷も念頭を去る程だ。

平明な瀬を左に石に渡り、糸をたれてはヤマベを釣りあげ、夜は流木をつみ重ねた大きな焚火にのんびりし今日の一日を回想するほど、夏の沢歩きの快味は盡きぬまでに味わえるのである。

目的のエクラチカラ山に登り、国境を北上する尾根縦走を、お花島と築は遺松濃きを交互に続け、オヤジの足跡を伝う楽しいものである。

この途中に突如する園谷の美しさと共に、一趣向に

ある山脈は、日高山脈のよさを以て取り揃えてあり
日高の山をさぐるうとゆう人に文句ひく雅樂さだ
多登路と云えよう。

両面の麓にたの、諸川の増水して歩けぬ場合に
を札内川は割合らくに歩かぬ。

「一」のルート

一日目

広尾線中札内駅に下車。國道を通つて上札内に至
る。約八杆。帯広からバスを利用してよい。

ここで口道と分れて南札内に向つ。南札内まで約八
杆。なほ進むと道は雑木林の中を過ぎ、最奥人家
を越えて、札内川の函に達してゐる。南札内からこ
こまで約六杆。ここでトラック道路は左岸にわたつ
てゐる。

一方林道はこの函を越す橋の手前から始まり右岸沿
ひに札内川六のの沢までつづいてゐる。林道起奥か
ら約一時間でトムラウシ川合流へ一七七八。米よ
りの沢へ更に二時間ほどでコイカクシユ札内川合流
につく。

ここから更に三時間、札内川七の沢へ一八二三米
よりの沢へ合流につく。

支流のコイカクシユ札内川を溯れば、コイカクシユ
札内川に合流することができる。

林道の始りまでもし道材のトラックに運来できれば
中札川よりここまで一日の行程である。

二日目

コイカク合流より引続き右岸の石を伝ひ、六ノ沢
へ十勝ボロシリ岳より出てゐる沢へ、一名スマリンネ
ベツンまでは約三時間かかる。

本流をさらに三十分を溯ると七の沢合流に達する。

この二つの合流を土地の人々は三岐と云つてゐる。

七ノ沢をすぎると沢はようやくせまくはり、石も大
きくはつてくる。

時々水際の苔むした岩を伝ひながら溯る。

七ノ沢より二時間ほどで八の沢合合にくる。八の沢

はカムイエクウチカウシより来る沢である。

今日は樂々一日であるが、大きな焚火をつくつて、
明日の英気を養ふこととする。

ヤマヤを相当大きいのが釣れる。

八の沢よりカムイエクウチカウシ山

三日目

この沢はカムイエクウチカウシの最短路であり

合流は附近から日帰りすることまでできるし、頂上でゆつくりしにじらばは、凡ゆる沢のカールに泊り、左の沢のカールに懸して、その沢を下るのをよいだろう。又エサオマン戸葛別岳へ行くのじらばは左の沢を登つて、そのカールに泊つた方がよいと思う。

溯ること二時間足りずで滝が三方から落ち合う所につく。ここまでは沢は平坦で歩き易い。

中央の滝を登る。滝は二段にひつており、傾斜は四〇度前後、滝を越すと樹木は倭少に限り、やがてカールポーターンに出る。滝の始りから約四時間と見知らぬ良いであろう。

頂上に往復するには、カールから國境一八四〇米との鞍部をめぐけて登る。カールから頂上まで二時間で登ることができぬ。

降りば札内川まで約六時間と見れば充分である。

左の沢よりカムイエクウチカウラ山

左の沢を経て國境に出ようと思つたらば更に本流を溯る。

三日目

八の沢から三十分程で、キネンベツ合流へ八の沢と九の沢の中間の左岸の本線の沢に至る。

大きな石のゴロゴロしに本流を少しのぼると、右岸から急げ沢が合し、向きなく左の沢合流へ九一の沢二岐しにつく。

左の沢は大きな石が累々と積み重なるに向から落ちてゐる。左の沢に入つて一時間とすると滝に出合ひそこから函が始まる。

浦壺には岩魚がうようよといるから、ちよつと釣るだけであ晩のあかすに函に合わせらぬよう。

右岸の急傾斜を登り、古川鉦目召りに函を捲き、約一時間と捲き終える。沢はだんだん開けて七月中旬じらばやがて大きな雪溪に出る。

この辺りから大きな木がだんだん少くなり、高度を増したことが感ぜられる。

せう急に登ることなく、沢はやがて、カールポーターンに入り込んでゐる。函の上から約二時間かかる。

このカールは、二つのものを合せたもので、中央のモーレンの丘の上には、北大山岳部長改奥村敬二郎氏のお墓と、それと隣接し有馬洋次追悼のケルンがある。

にき木はやや不足するがどこでも泊ることができぬ。

四日目

カールから南の方に昇る鞍部を経て、カムイエ
クウチカラシ山に至る。往復約四時間である。
更に國境を北上し、メナワツ刀岳の分岐点附近まで
進むことができよう。

これは次の「ニ」のルートの近コースである。

「二」のルート

「一」のルート共に楽しい山旅を漸次出来る。

日高山脈の中で、一般向きの容易なものである。

エサオマントツツヤツ岳の参照

日高側の登路

「三」のルート

カムイエクウチカワシ山を日高側より登るルート
の中では此のクイボクシユピチャリ川を溯るのが最
も普通であり、又最も古くより登られていた。

このルートは下流より本流を溯りつめる他、シユフ
ヤツ川の上アサカサンヤ沢より或は又、シユンヤツ
川上流のカシコツオコナイ沢を溯つて低い鞍部を乗
越し、共にクイボリの本流に出るなど、幾多の興味
あるルートがとらねる。本流の上流は極めて歩き易
いが、中流は函の連続で、河の長く大きい筈と共に
一般的ではないが、日高の旅らしいルートである。

最近、鉺山南拓団が奥まで入るに及んで急に南け、
奥に途中までは入り得る様になつた。

日高線本桐駅下垂、ハスにて取留にいたる。

取留より上三石をへて、郡境尾根を越えてメナシヤ
ツ川を大きな釣橋で渡ると、奥高見と云はれる南拓
団の南壑地に出る。この南壑地の位置はペンケヤツ
沢合流よりメナシヤツ川右岸に開けた台地である。
道は南壑地を通り、メナシヤツ川がセタウシ山の
東で北に転ずる少し手前にある鉺山まで達してはいる
。対岸のイヤツ沢の方には渡渉しなればはらわぬ
。一九四の五頃は鉺山より越は奥にメナシヤツ川の
右岸を通り、クイボクシユピチャリ川に沿つて、
地元の「クイドンナツス」の一三—五米の東方あたり
をついでに、現在は非常に荒れてあり、通過困難
であるが、増水の際には利用できる。

又上三石より南拓団に行く道に分れて、セタウシ
山の東の鞍部を過つてイヤツ川の合流附近に下る道
もあり、ケリマツ川よりイヤツ川に乗越す道を最
近つければいい。

又南拓団に達するには以上の他に、静内より御園を
へて、シユンヤツ川に分れ、メナシヤツ川の右岸の

道をへて進むことのできるが、余り利用されてはいない。

これらの道ができる前はすべて、ケリマツル川を最後までつめ、尾根を乗越して、イベツ沢に下つたのであるが、地図の誤のため昔は随分苦戦したもので一週間にやつとイベツ沢に出たと云う記録もあり、この辺は大分容貌を一変してしまつてゐると云えよう。

南拓団又は飯山、イベツ沢合流附近に達するには前述の種々のルートを通つてそ一日半の行程であるが、本桐からのルートは、道材のトラツク等を利用しうることであり、普通用いられてゐる。

種々のルートによつてイベツ沢合流につくと道はメナシベツ川の左岸の広い針葉樹の繁つたテレスの上についており、イベツ沢より約一時間でコイカワシユラビチヤリ川の合流に行くことができる。この林道が甘いときは、イベツ沢より、この合流まで川添ひに歩いたのであつた。豊饒は水量と、大きな函のため、一日以上もかかつたのである。

ここまで本桐又は静内からする二日はかからぬのが普通であるが、トラツクの利用の有無などにより、

時間の差が生ずるので、二日目はこの合流に到ることとして覚悟しよう。

三日目

メナシベツ川の雪がひ流れば二分さだたと云つてまはし手強い。

合流より黒々とした函が約一里ばかりを續く。函は主に石岸を捲くと樂である。

沢が双矛に左に曲り始める頃より南へ、河原とむる

。合流より五時間、この河原を一時向半を歩くと盡きて、又函に出あふ。左岸のテレスに出て、そのまま捲きつづけると、地図「イトノナツス」に入つてから最初の左岸の水線の沢に出る。

合流に露営する。

四日目

合流より十分を歩くと大きな函がある。石岸を一時間位捲いて通過する。捲き終ると左岸より水は本流と殆ど同量の沢が入つて来る。此の沢が無名沢と云はれるもので、地形図では、コイボワシユラビチヤリ川の「イ」と「ボ」の向に入つてゐる沢であり、地図のこの大きき誤りのため、古くより歩くの人達が、無名沢の溯行に失敗したのであつた。

此の沢の対岸のヌツシユ中を巻いてけるうちに見落すことがあるから、無名沢に入る人は注意すべきである。

露菅地より一時間半でこの合流に達する。

合流より又函、約二時間ほど左岸を八ずらひければはらひ。ここが終ると、又すほらしく天きは函とひり、減水時でも中の通廻は不可能である。

石岸を高く捲かなければはらひ。此のあたりは函が一時計けても、又すぐに函に出合つので沢辺に下らず、其のまま石岸を捲きつづけに方がかえつて樂である。

無名沢の合流より、困難は函捲きを続けながら約六時間、本流が東に直角に折れる手前一軒から突然沢は開け、広々とした明るい河原に解放される。

二日向の暗い函の中の生活より解放されて、此の日は、河原の豊富で流木を集めて、ゆつくりと泊るがよい。註一参照

五日目

此の日から沢歩きは極めて楽になる。函の切れ目より一時間を美しい河原を歩くと石岸より割に大きき沢が入り、本流は急に東に折れる。森味を帯びた

歩き易い河原が続く。

小さな函はあるが中を通れる。一八一七米の沢まで札内川上流の地帯に入つてから一時間半で達する。この流沢の合流のすぐ上は、函をはずすが、左岸を絡むとよい。

相変らず楽な沢に能率をあげると、又函がある。左岸はオーバーハンクをなしているが石岸は簡単に捲ける。沢は少しづつ急になつて、正面に國境が見えて来る。

露菅地より約七時間半で、エクウチカワシと一八二二米峰への二岐につく。この二岐より、エクウチカワシのカルドが見え、南面に氷出する岩尾根を見上げるのは、すこ味がある眺めだ。

六日目

左の沢に入る。すぐに左より沢が入つて来る。この辺は一八一七米の方より、春には猛烈に雪崩れるらしく、荒涼とした所である。

左の本流に入ると、そろそろ函状をなして来る。左岸は高い岩壁で石岩を捲いて滝の上に出る。しばらく沢を歩くと、大きな岩壁が両岸より迫り、門の様を呈する。左岸を巻いて、雪溪の上を下

りる。二岐にはつてゐるが、左の沢に大ると滝の連
続と見る。雪溪より又すぐ二岐にむるが、右に入る
と傾斜は灰芥にゆるくはつてお花畠の中を流れる清
流を登れば、コイボク源頭の美しい小じんまりした
カール底に達することが出来る。二岐より七時向を
要する。此のカールは日高の牧あるカールの中でも
高度が高く又眺めぞ、素直なものであり、日牧に余
裕があれば、一泊するのをすすめる。

カムイエクチカウシの頂上までは約四十分。お花畠
のカールバントを登れば産し得る。

とほりの八の沢のカールに出るのを容易であり、
二岐より一先、八の沢のカール、又は、頂上を越
えて、九の沢まで足を延ばすのぞと程強行ではな
い。

証 1

本流のこの附近にシユンベツ川より乗越されたに記
録もある。即ちパンケアアカサンヤ沢を最後までつ
め、一四三四米の東の嶺に出て、東に下つて、標高
尾根の南の沢に出たものである。

パンケアアカサンヤの最後の二岐より、強行ではあ
るが、一日でコイボクの本流に出られる。

又一三二五米の北の沢へカシコツオマナイしをつめ
て、最低鞍部を越えて本流に出たものもある。
シユンベツ川より一日半である。

最低鞍部は地図と異り、すつと一三二五米によつて
居り、鞍部よりの沢を下つてくると、本流の函が切
れるほんの少し手前で、函の中に入つてゐる沢に出
る。

「四」のルート

シユンベツ川よりカムイエクチカウシ山に登る
そのは、登路としてよいものとは云えぬ。

ベツピリガイ沢を経てカムイウチカウシ山

イトンナツス岳「一」のルート、第五日目を

参照してシユンベツ川を溯る。ホニイトンナツス川

合流より真白い大きな石の続く歩き易い河原を約三

時向にして、六〇〇米の水線二岐ベツピリガイ沢に

至る。ここは打ち開けた冕時のより所でキヤンスに

よい。ベツピリガイ沢に入り、しばらくは平坦で歩

き易いが、向をひく一〇〇〇米附近より函滝の連続

と見る。殆んど捲かずに済むが増水の場合は溯行不

可能とむらう。

之を溯り一八一七米の北の嶺より、西に出ている出

尾根に登る。

この辺まで約一日行程。キヤンス地として良いところ
は函より上にはない。

此よりエクワチカウシ山までは道松の間に熊の道が
ついていて、比較的歩き易い。

ハツピリカイ沢の一本上流の頂上の北面の沢より
カムイエクラチカウシ山

これは大段困難な沢である。むしろ滑若岳と國境
の分岐處に登り尾根伝いに頂上に登る方がよい。

滑若岳の註1、2参照。尚この附近の地図の誤りには
充分注意せねばならぬ。

渡大山岳部部報登高行一八九五
北大山岳部部報才四、五号

参照

札内岳

(一八九五、五米)

十勝國 地図 札内岳

札内岳は、水口シリ岳とともに國境線より東に派
出した支脈上にあり、戸島別川と札内川の分水嶺を
なしている。

日高山脉のよい展望台である。

カムイエクラチカウシ山より眺めた札内岳の姿は、
調和のとれた美しいものである。

この山は古くから登られた山の一つで、登路として
は戸島別川の支流ピクカペタ又沢をとれば、容易に
頂上に上ることが出来る。

帰りにには札内川源流に下るのでよいであらう。札内
川のキネンハツは滝と函のかはり大きなものがあり
、困難な故すすめられぬ。

又札内岳より西え尾根を伝つて國境線に至ろうとす
るには、北側の斜面を歩けば道松に苦勞することは
あまりない。

登路

一、八千代―戸島別川―ピリカペタ又沢―札内岳
二、中札内―札内側源流―札内岳

その他エサオマントツタベツ岳より尾根伝いに至
り、ピリカペタ又沢に下るルートをとらねる。

一日のルート

一日目

十勝鉄道帯広部線八千代駅に下車、ピリカペタ又
沢合流に至り一泊。

二日目

ピリカバタ又沢は原名の美しい二岐なる意味の如く
下流は平明な流れて段々と傾斜が加はり、一岸を迫
つてくるが、滝や函の苦勞を少し。

合流より坦々とした河原が続き、水線記入の二股
まで四時間である。しばらくすると沢は急に左折し
最初の滝に至る。その手前の小沢を登つて左岸上
に至るが、登りにはまぎらはしいから本流を行くと
よい。下りに頂上と一六五五米峰との鞍部より来
れば、ここに出らぬ樂である。

本流を行き二、三の滝を越えてカール状の凹地に出
る。登頂は容易である。水線記入の二股より上には
よい露岩地は多い。その間約五時間を要す。

「二」のルート

カムイエクウチカウシ山「一」のルートに従つて
左の沢合流へ九一の米二岐に至る。

三日目

左の沢合流より、約二時間本流を溯ると、ナメワ
ツカ岳との分岐点へ地図、札内川上流の北西端の
カールから流れて来る沢との出合ひに達する。(註)
この附近は沢はぐつと開けて明るくなり、笹の生え
に斜面にタケカバが卓在している。及びで最後の水

線二岐に出る。(註2)

本流をほぼそつめると、やがて沢の上にスツシユが
かびさり歩きづらくなる。

南岸のスツシユを弁けながら進むと、石岸より滝を
かけて小沢が合し、又本流を少し上流で滝をひして
いる。左岸をまく。このあたりからしはやくの間は
大きな石がごろごろとし、沢はぐんぐん高度を増し
てくる。

やがて水が涸れ、沢の傾斜をゆるくする。再び水
が現れ、沢はぐつと明るく急にひり、カレを経て、
札内岳頂上に達する。

最後の水線二岐から往復約六時間余りである。

註1

この沢は日高側のシユンハツ川より、十勝側の札
内川を越える陸路として使はれる。

註2

エサオマントツタハツ岳への登路と見る。
滝の連続で岩登りの観がある。上り約四時間。下り
にはハイルを必要とする。
さそはければ石岸の崖根を下るとよい。

ポロシリ岳

（一八七五・五米）
十勝郡 鹿田 札内岳

ポロシリ岳は位置が主山脈から余り密接して居るので、余り多くは登らねてはけしが、オピリネツス川よりスマクンネハツ川に越えるのを興味がある。この原は日高山脈の上をひし昇望台である。日高幌尻岳と区別して十勝ポロシリ岳と云うことがある。

登路

- 一、八千代―戸高別川―オピクネツス沢―ポロシリ岳
- 二、中札内―札内川―スマクンネハツ沢―ポロシリ岳

コースのルート

十勝ポロシリ岳より北流して、戸高別川と四一セ木地帯にて合流するのがオピリネツス沢である。その神行は極めて容易で、エヒの人々は岩魚川と稱している。

この沢にはヤマハハヒはしが岩魚は多くいるため

あろう。

頂上附近はかたまり急峻だから壱溪かはい方が楽である。合流より一日で往復出来る。登り五時間、下り四時間を要する。

コースのルート

中札内より、カムイエケウチカウシ山コースのルートに従つて、十勝ポロシリ岳南より弁するスマクンネハツ沢へ沢の沢へ合流に至る。

沢の沢合流よりはやや強行だが日帰りでできる。最後の木線の二岐を右にとり、大きむ刀を登つて滝をすく。手に少しカレを登つて、スツシユのかぶつに沢を登りつめると、キンボウケヤユリの咲き乱れに葎袴のよい急げ草原に出る。そうぞこから頂上まではずぐである。朽ちた三角笠のやぐらの立つこの頂からの園境の眺めは又格別である。

イドナツフ岳 (一七四七・八米)

滑若岳 (一七九九・一米)

日高國 地圖 イドナツフ岳

イドナツフ岳、及滑若岳は共に國境より西に外れた長大な尾根上に位置し、その主峰登路とびるべき、シュンベツ川及び新冠川は何れも多くの函を有する悪沢であり、しかもその長大さの故この旅行には多くの日数を要し、いつれの天を登路として送はれたのは僅かである。

従つて比較的多くの未開拓の部分を含し、その全貌は明らかにはつていない。

この両山は山容の平仄にむかひあはれず、國境を遠く隔れて日高山脈中部の展望台として絶好の位置を占め、又人跡稀むる地域としての美しさを備えており、真に日高山脈最奥の山々に属するに疑いなくある。

しかしこれらの河川の登路に當つては充分な用意と

同到ける注意を必要とし、特に増水の場合は、天の登路の困難さは、ヤオロマツフ川中の川のせせりに匹敵するほどである。

イドナツフ岳えシュンベツ川より登るには、イドナツフ川より遠するものが最も容易であり、これに続いて新冠川よりシウレルカシユベ沢を経るものが容易であると思はれる。

滑若岳えは十勝側より國境に出て、分岐点より尾根伝いに往復するのが最も容易であり、日高側よりルートは、新冠川、シュンベツ川、共に困難であり、長時間を要するにめ、滑若岳のみを登るために用いられることは少い。

以下主要なルートについて次に記す。

イドナツフ岳に登るその

- 一、シュンベツ川―上アスカサンベ川―アスマナイ沢―チャワンナイ沢―シュンベツ川―ボンイドナツフ川―イドナツフ岳
- 二、シュンベツ川―イドナツフ川―イトナツフ岳
- 三、新冠川―シウレルカシユベ沢―イトナツフ岳

「一」のルートに就いて

一日目

日高線静内駅下車、バスにて御園（地図上印）に至る

二日目

菜根川に沿う道を通り、農家を空て、シユンベツ川、メナシベツ川合流附近、シユンベツ川にかかる橋に至る。御園より約一時間半。

これより橋の下を通り、春別川右岸に沿う小道を通り、約二時間でオクルンベツ川合流に達する。約一五分程でオサナイ沢を越す。

此の沢は小さい。それより道は高く石岸に登り、大抵等高線せいに捲く。途中ヒザ迄の美しい笹原を越し、約二時間半でペンゲヒビ天合流泉の対岸に出る。ここには飯場の跡があり、開けに感じの明るい所である。

道は木濠をたどり、地図イトナツスに入る境より明うかではなくひる。

地図イトナツスに入り、右岸よりの最初の水線沢近約一時間半、この辺は小さい函状をひし、キャンズ地によくほい。之を越したあたりにキャンズする。

三日目

道はほとんどわからず沢に入るのが良い。

右岸を進む。巨岩が岸に横たわり、川幅を狭くなっているが、青い滑らかな石をとびつたつて沢は比較的歩き易い。右岸に針金の下つてゐる所をすぎ、小さい函（一八〇米附近）を越ぎに迂りより河原とひり、川は大きく蛇行を繰返す。

下アスカサンベ沢（ムーオー・一本よりの沢）は約三時間、これより川は更に蛇行を重ね、曲り目はカレとひつてゐる。増木の時は歩き難い。

約二時間で上アスカサンベ川合流に達する。この合流泉は広い河原で発持の良い所でありキャンズ地として絶好である。

之より本流を溯行するルートは、ユニのルートに参照すること。上アスカサンベ川に入る。平坦は川筋は蛇行を繰返し、歩き易い。

地図の「ユニ」の字附近に右岸より比較的大きく沢が入る。小さい沢を数本越し、約三時間で五三〇米附近の函に達す。函を捲き終えた所は二岐になつて居り左の沢の約二十米程奥には、小さい滝がかかつてゐる。これがアスベナイ沢（ムー八六一・〇より南

流する沢である。

この附近に一泊する。

アスペナイ沢に入り本流をつめて尾根を乗越し
コイボクシユシビチャリ川に達することを出来る。
ここより約一日行程である。

四日目

アスペナイ沢に入り約一時間、八〇〇米附近の小
滝に達す。捲き終えた所は三岐になつてゐる。真中
の沢を登り約一時間半で二岐に達する。左の方が太
さい位であるが右の沢に入る。この辺までは明るく
乾いた発持のよい沢である。

一〇〇〇米附近の二岐を左に入り、膝迄位の筈にお
ほはれた発持のよい鞍部を達する。

アスペナイ合流より約五時間を要する。これより
チャワンナイ沢へ一四三四米より北流し、その手に
合流する沢に下る。滝が多く、歩き難い沢である。
約四時間半にしてシユンハツ川本流に達し得る。

合流處に一泊すれば好都合である。

五日目

本流を溯る。河原少く木蔭を行く、あまり歩き良
くはない。左岸及び右岸よりの沢を一本宛越し、約

一時間半でルシユツオマナイ沢合流に達する。

カラコツオマナイ沢は、ボンドンナツル岳より東南流す
る水線沢、即ちボンドンナツル川出合の下流、約
四〇〇米附近に入る水線沢で、合流處は平坦な林と
なり、キヤンブ地にも良い。

この沢をうつてコイボクシユシビチャリ川に乗越す
ことを出来る。註一参照。

ボンドンナツル川は一米半程の滝をひして本流に
合してゐる。この附近を最良のキヤンブ地である。
六日目

本流を溯行すれば、滑岩岳に達しうる。(滑岩岳
のルート(1)を参照)

又ボンドンナツル川よりイトンナツル岳に往復し
うる。即ち、合流處より、一時間半で、七四〇米附
近の二岐に達する。左の沢は小滝をなしてゐる。

この附近までは、大きな石のゴロゴロした歩き易い
沢である。

左の沢に入り、左側より滝となつて合する沢を越し
、約一時間で二番目の二岐へ一〇〇〇米の筈の地帯
に達する。

これより上は、イタドリのかばさつた沢となり傾斜

を相当増し、又滑り易くはる。

この二岐の左の沢に入り、以て大体水量の多い沢をとると、水のはくはるあたりにより開けた笹と、お花畠の斜面とひる。二番目の二岐より約三時向で、三節卓と最高卓の向の稜線に達しうる。最高卓とは三節卓の北側、一七八〇米であり、いづれを登んでも約一時間向で往復しうる。

稜線上は道松が盛生し、歩き難いので、ポイントンナツス側の斜面を歩くとよい。

無路は約五時間向を要する。滑りやすいので注意を要する。

「二」のルートに就いて

地図イトンナツス上アスカサハ沢合流卓より、イトンナツス川合流卓を平目じ河原で歩き易い。約二時間半を要する。

この合流卓は広い河原をひしき持よい場所である。此処に一泊するのがよい。本流を溯行するには往復を参照のこと。

四日目

イトンナツス川に入る。水量は本流の四分の一ほどである。

五〇〇米附近までは、平坦に歩き易い沢であるが、独立標高八三五米の東より発する沢の合流卓附近より沢に沢は傾斜を増して来る。

標高九〇〇米附近より函は始る。之の手前で一泊する。

五日目

この函は左岸を約一〇〇米程も高くまき、約三時間向で沢に下ることが出来る。これより上流は傾斜は増すが、夫程困難ではない。

沢をつめて、割合にスツシユの少い草附を登り、頂上に達する。

一日行程としては相当に強行である。

「三」のルートについて

日高線静内駅より刺園までルスの便がある。

刺園より一二軒で隆内(ケマナイ)に達し、更に若村東方二軒の地卓で新冠川を左岸に渡る。

林道は地図イトンナツス岳西上、独立標高八七一、一米の北西、水深〇・七の符号の附近まで右岸沿いについている。徒歩地卓より約六時間向を要する。此の上流は滝と函が続くから、この附近に一泊するのがよい。

二日目

函は独標一・三四・一より来る右岸の沢の合流まで続いてあり、増水るときは通漕困難である。

この函を越すのには約七時間を要する。之を越して一泊するのがよい。

三日目

函が切れてかうシワレルカシユペ沢まで約六時間地面上的の二つの函は右岸をまくのがよい。シワレルカシユペ沢合流泉附近に一泊する。

此処を来るには、上豊気別より、モウレルカシユペ沢を乗越し、本流に達するルートへ幌尻伍の頂、登路「五」を参照し或ひは宿主別川を廻り、八〇五木の西の鞍部より沢に下り、本流、水深〇・五の地帯に下り、本流を下つてシワレルカシユペ沢合流に達するルートへ幌尻伍の頂、登路「四」参照しがあり、右岸のルートが最も容易であり、日数を短かくて済む。

四日より六日迄

シワレルカシユペ沢に入り、約五時間で七四〇木附近の三岐に達する。三岐の本流をつめ、水の甘くはるところより左側の沢形をつめる。

最後は急斜面のヌツシユをわけて郡境尻根に出る。三岐より約二日を要する。尻根には川分けがあり、境上まで約二時間で達し得る

註ゆについて
カシコツオマアイ沢に入る。初めは暗しが割合に歩き易い沢である。

約二時間で二岐に達す。右をとり一時間で最後の大きな二岐に達する。左の沢は両岸迫つている。右の沢に入り東南の方向に小沢を遡んで登る。約二時間で鞍部に達す。

沢に下つて約二時間半でコイホクシユビチヤリ川四八〇木附近の河原の所に出る。下流は函となつている。

註ゆについて

イトンナツヲ川合流泉より本流に入り、ボンイドナナツヲ川合流泉に達することを出来るが、チヤワシナイ合流まで二つの大きな函があり増水の場合は通漕困難であり、上アスカサンバよりの乗越えの方が有利である。

函の位置は△九三一・八の南四〇〇の字附近及び△一八六一・〇の実際は一三六一・〇の北一二〇〇

の字より西流する沢の合流、標高四〇〇米附近の二つと思はれる。

合流よりテアワンナイ迄三日は要する。函は最初右岸、次は左岸を捲く。

滑若岳に産するルート

(1) 春別川本流より滑若岳へ

(2) 國境より尾根伝いに滑若岳へ

(3) のルートは「ルートの」のルート中、滑若岳より分岐

点への尾根の頂参照の事。

十勝側より國境へは、札内川上流の一・二〇の二岐を左に入り、分岐点に出るのが一番近い。同二岐より約一日行程で分岐点に達し得る。

(4) 春別川本流より滑若岳へ

イボンナツス「ルートの」のルートより五日迄を参照すること。

六日目、本流を溯行する。真白い大きな石の続く歩き易い河原を約三時間にして六〇〇米の本線沢へハツピリガイ沢と云うのが合流する。

これを溯行すれば、カムイエクウチカウシ山に達し得る。ここは申けた受持の良好場所である。ここに

更に広い河原を歩くこと約一時間で、右より滑若分岐点よりの沢がカムイエクウチカウシ山よりの沢を合して合流する。へ函上七六〇米附近である。

この附近には地図に大きな誤りが三つある。

即ち山、滑若岳直下に発する沢の本流に合流する奥の地図の誤りは、一五〇二米独立標高のある尾根は本流二岐まで連続して延びている。

次に滑若岳よりのその沢は、カムイエクウチ山に発する沢の七六〇米附近に注いでいる。

(2) 次は誤りは那境尾根と独立標高一五〇二米よりの尾根の合する地点である。

七二〇米の橋より発する沢と、最上鞍部より発する沢は各々が別々に独立標高一七五〇米より発する沢に注いでいる様に記してあるが、実際は一七二〇米よりの沢は、当然水線の記入があつて良いほどに大きく、鞍部に発する沢や、独立標高一六七〇米よりの沢を合して本流に合流してしているのである。

(3) 更に独立標高一六〇〇米と△一三四一・四米のある尾根はイボンナツス岳と、その東北一七五〇米峰との間の小橋へ一六八〇米しかから伸びているのであり、一七五〇米よりではない。

従つて七六〇米の二岐を右に入ると、國境ト滑若岳
分岐處に達することが出来る。註(1)参照。

その沢の途中より更に右に入ると、カムイエクウチ
カウシ山に達しつゝる。へ註(2)を参照。

さて七六〇米の二岐を左に入ろう。

小さな函を越し、約二時間左よりの一七五〇米よ
りの沢が合流する。函上八〇〇の身附石である。
この二岐を右に入り約一時間にして郡境一六七〇米
より発する沢が出合う。沢の最低點郡よりの沢の合
流する地處は絶好のキャンパ地である。

これより一七二〇米の窟よりの沢をつめるのだが、
ここより上流にキャンパ地がはいから一泊するとよ
い。

七日目

此の沢をつめる。最後は岩場とびるにめ尾根にと
りつかざるを得ない。郡境一七二〇の窟まで約十一
時間を要する。これより滑若岳頂上を至て、分岐處
に達し得る。尾根上は熊の道が北側にあり、真中辺
りの窟までは比較的涉どる。
約四時間を要する。

註(2)について

七六〇米の二岐を右に入る。発持の良し河原を二
の分目ど歩くと左岸よりカムイエクウチカウシ山よ
りの沢が入る。左の沢に入る。暫くして沢は函状を
なし歩き遅くびる。

約二時間で國境一八五二米の南の窟へ一九〇〇米よ
り西南流する沢が合流する。之より上流は、小滝
が連続している。

四つ程窟を越しに所に、左より滑若岳直下より発す
る沢が合流する。

約一時間、この辺に一泊するのがよい。

この上流は、キャンパ地により所はない。石の沢に
入り分岐處まで約八時間を要す。滝の連続とびるが
大体中を登ることが出来る。

註(3)について

エクウチカウシ山その沢に入つて、初めのうちは
一枚岩をなし樂である。

八四〇米の二岐は左に入る。この附近より沢は垂く
なり、傾斜を増し、両側は函状となり、からまねは
びらなくびる。一〇〇〇米の二岐は両方とも窟をは
している。左の沢は慶應の香藤氏が阻つてゐるが、

面方とも滝、函の裡続で、非常に悪い。

右の沢に行き、右手の尾根に取附く。この附近まで八時向を要する。ここよりカムイエクラウチカウシ山の頂上迄は更に約四時向を要する。

北大山岳部報第四、五号参照
慶大山岳部報登高行一九二九年参照

一八二二三米峰

十勝・日高國境

地図 札内川上流

國境線上にてカムイエクラウチカウシ山と、後述の
コイカクシユ札内岳（一七二二米）との中間に位す
る。

北東に流れて札内川に入る沢は七つの沢と稱し、
上流は極めて険悪な悪場が連続するため登路として
は良くない。北方カムイエクラウチカウシ山への尾根
は道松がひどいが、南方は割合に容易に歩いてコイ
カクシユ札内岳に行ける。

又コイホクシユシビチヤリ川を九五〇米附近まで遡
行し、一八二二三米峰北の鞍部に出る様に登り、尾根
谷いに達するのを良い。

しかしいづれも一般向の登路とは云えない。

このピークの南にはじり上る沢は大きな沢でありなが
ら出口が最近まではつきりつかぬ所に居た。

名前が無いので無名沢と云う。

極めて悪い沢で近年ようやく廻行された。登路とし
てはむかぬ。

登路

一、中札内ー札内川ーコイカクシユ札内川ーコイカ

クシユ札内岳ー一八二二三米峰

二、静内又は本桐ーメナシヤツ川ーコイホクシユシ

ビチヤリ川ー一八二二三米峰

登路として石の他いくつかあけられるが、此の山
は、単独に登られることは殆どなく、主にコイホク
シユシビチヤリ川より札内川にぬける時に、たゞ頂
を踏まねると云うに過ぎない。

七の沢よりの登路は記録はあるが、氷が悪く、登路
としては良くないから省略するが、日高側より頂に
登り、その十勝側への帰路としてとらぬ様注意され
たい。

又一八二二三米峰とカムイエクラウチカウシ山までの尾
根は殆ど歩くことのできないが、最低鞍部附近のフ

ツシユは相当に猛烈である。

北の最低鞍部より北は、カムイエクウチカウシ山まで案内である。一八二三米峰より、八の沢源頭のカールまで八時間である。

登路の兎明としては、十勝側、日高側と分けずにコイホクシユシビチマリ川の最後の二岐より、まとめて兎明する事とする。

カムイエクウチカウシ山のコイホクよりのルートの場合により五日目はエクウチカウシとの二岐に露営する。

六日目

二岐を右に入る。二岐より百米を進むと、右より沢が入つて来る。左の沢は暗い感じであるが、潮るにつれて次第に沢は開け、ガレ状をびして来る。

次第に傾斜がますます、又ガレ状の沢が入つて来る。この右の沢を登れば二岐より約五時間で一八二三米の北の國境のコースに出る。此の登りは北に沢をへびて、カムイエクウチカウシの南のカールが次第に大きく見え出し、はかばか登山のよい登りである。この國境の稜上より一八二三米峰の稜上まで一時間で達する。

一八二三米峰とコイカクシユ札内岳までの尾根は、一旦千五百米近くまで下るが、副に歩き長い尾根である。

頂より南に下つて、一五八七・七米(ピラトコ三山)分岐点まで一時間、更に南に下つて最低鞍部附近で露営する。

七日目

コイカクシユ札内岳の最後の急な登りは、岩が露出して極めて愉快に登り得る。ピラトコ三山分岐点よりコイカクシユ札内岳まで約三時間半を要する。

コイカクシユ札内岳 (一七二二米)

十勝・日高國境

地形 札内川上流

札内川上流地図上、札内川のうちの亭附近に合する支流即ち、コイカクシユ札内川源流に位置し、ヤオロマツス川、無名沢、札内川の分水界点をなす感あり。

この頂に立てば、南はペテガリ岳、北はエサオマントツタハツ岳まで、一望のまことに眺めうる。

コイカクシユ札内岳を溯るのが最も普通で、これよ

リ南へ尾根を伝い、約三日行程でペテカリ岳を獲す
ることが出来る。

尚この山のみを登るのは、苦勞が大きい割に面白く
ない。普通はヤオロマツ岳、又ペテカリ岳への途
次通られる他、日高側からの帰途に登られることが
多い。

登路

一、中札内ー札内川ーコイカクシユ札内川ーコイカ
クシユ札内岳

二、静内又は本桐ーメナシハツ川ーコイボクシユシ
ビチヤリ川ー無名沢ーコイカクシユ札内岳

十勝側の登路

「一」のルート

一日目

中札内からコイカクシユ札内川の合流迄はエクウ
チカウシの札内川よりの登路の項を参照されたい。

二日目

これよりコイカクシユ札内川に入る。合流からそ
歩き易い。

広い河原を行くヒヤがて二つ函があるが共に簡単に

捲ける。合流から二時間定りずで二岐につく。六四
〇米附近である。

二岐の左右の沢は共に滝が多くてけわしきから、中
央の尾根を登降しなくてはならない。この尾根は鞍
がはけしく國境まで一日にたづなりかかるから時間が
余つてゐる、二岐附近に泊つて英気を養つておいた方
がよい。

三日目

その登る尾根は石の沢に少し入つて、最初の滝の
手前から取りついでを良いが、どこから登つてを同
じ位根曲り毎に苦しめられる。

途中に水は全く無いし、テントの張れるだけの平地
を千米附近の一部の他は見出さない。

兎米に鞍を令けて行くうち尾根はやせて来てやがて
國境につく。

出た所は稜上の北はしだが、コイカクシユ札内川頂
上は尾根型山稜の南はじである。

南に國境を伝い、ヤオロマツ岳、ルヤツネ岳、ペ
テカリ岳に行く事ができる。ヘペテカリ岳「一」の
ルート参照し

注意

コイカクシユ札内岳はペテカリ岳等々の登路として
しはしは登らねる他、日高側の険悪な沢を溯行して
中部日高の諸峰に登り、その帰りに多々種々たる
いる。ここまで来るともうすく首に出らねる受母
さから、うっかりして降り、しはしは難儀したパ
ーティがあつた。中には不幸にも滝より墜死した例
も有つた。隘りには頂上より北へ二つ目の縮へここ
より國境は西へ曲折するの辺りから出てゐる出尾
根を上りのコースに石つて下ることを怠れず、又
出尾根に迷ひ込まぬよう慎重に歩かねばならぬ。

日高側の登路

「ニ」のルート

此の無名沢からのルートは日高側より國境に達す
るルートの中で最も困難なものの一つであり、一般
的でない、サイルは必ず持参する。

無名沢は國境より見下してぞ折重つた急な尾根にか
くわて沢の流れは全く見え、其の険悪さも想像す
ることが出来よう。

此の無名沢より國境に達すべく、西より何班かが
コイボクに入つたが、地図の誤のため合流点が分ら

ず、一九四一年に始めて地図の誤が判明した。

即ち、無名沢は、地形図ではイトンナツスの図上コ
イボクシユシビチヤリ川の「イ」と「ボ」の間に入
つてゐるが、実際は一二六五米の北を流れる沢が本
流に入る地元の約五百米上流で本流に入つてゐる。
無名沢はコイボクシユシビチヤリ川の「コ」の字あ
たりより本流に平行して南下して輻リ「コ」の字附
近では、本流との向の尾根は約一時間、簡単に無名
沢に乘越し得る。

無名沢が本流と平行してゐる部分は一、一部歩き残さ
れてゐるが、函で通調し難く、途中より尾根を越し
て無名沢に下るがよい。

平行部より東に折れ、一三六二・〇の南あたりまで
は、河原があつて歩き易いが、一三六二・〇の南に
入つてゐる沢の所より函とひる。

ここより先は猛烈な函が絶え向なく続き、殆んど碇
き続けなければならぬ。

この沢を入つた記録は特殊なものであるから参考に
はならぬので省略するが詳しくは北大山岳部報
八号を参照されたい。

この時はコイカクシユ札内岳より西に出てゐる尾根

を登つて頂上に達したのである。

無名沢より、一八三三米峰、ヤオロマツス岳、一八三九米峰に出るのは極めて困難なものであると思はれる。

國境までは本流から二日見ては不足であり、細心の注意と、万全の用意とは必要なることは云うまでもない。

ヤオロマツス岳 (一七九四・三米)

十勝・日高國境

地図 札内川上流

一八三九米峰

同石

ヤオロマツス岳は、日高側に緩やかはお花鳥を、十勝側には、ヤオロマツス側に落ち込む急傾斜を持つ岩の多い頂きであつて、そこからがめると岳か北にはエクワチカウシの雄姿がコイボクシユシビチヤリ川源頭のカールを抱いて立ち、南の蛭蛇と連る國境山脈はパテガリえ続いているが、深いサツシビ

ヤリ川をへだてて相對するルハツネ岳の急峻な姿は印象に残るであらう。

一八三九米峰は、ヤオロマツス岳より、日高側にのびる出尾根の上に立ち、南北側をサツシビチヤリ沢と無名沢とにけづられた独特の偉容を備えている。ヤオロマツス岳は一般にコイカクシユ札内岳より

最も容易な登路はやはりコイカクシユ札内川よりコイカクシユ札内岳を越えて来るものである。上札内より三日半或ひは四日の行程である。

ヤオロマツス岳より一八三九米峰迄の尾根は藪がひどいが泳げる。サツシビチヤリ川より登ることも出来るが、相当に困難であり、日教を一週間以上を要する。

その他ヤオロマツス川及び無名沢よりは、懸垂した人と云えども困難であるので登路に及び難し。

登路

- 一、中札内ー札内川ーコイカクシユ札内川ーコイカクシユ札内岳ーヤオロマツス岳ー一八三九米峰
- 二、中札内ー札内川ーヤオロマツス川ーヤオロマツ

フ岳

三、靜内又は本桐―メナシハツ川―コイカクシユシ
ビチヤリ川―サツシビチヤリ川―ヤオロマツス
岳

十勝側の登路

「一」のルート

此のルートはコイカクシユ札内岳をへて頂に達するものであるが、氷を良く、ヤオロマツス岳の圏外を歩き良い。

中札内、札内川、コイカクシユ札内岳までは、コイカクシユ札内岳の「一」のルートを参照されたい。又ヤオロマツス岳までは、パテカリ岳の「一」のルートの尾根の頂を讀まねたい。札内川よりコイカクシユ札内岳に出てからは、頂上附近に泊るか、又は南に圏外を下つて最低鞍部に泊ることにする。若し露営地より、ヤオロマツス岳、一八三九米峰を往復するならば、最低鞍部に泊つておいた方がよい。ヤオロマツス岳より一八三九米峰までの尾根は、ヤオロマツス岳頂上の西の裾をばお花島で、尾根を比較的広い。

裾を越えて下りになるあたりよりアツシユをひどく、尾根を極めてやせて来る。

深い無名沢と、サツシビチヤリ沢とを眼下に見下しやせ尾根の香松に苦斗を強ひられ、最後の急斜面を登り切ると、ゆるくなつて細長い頂上に立つ事ができる。

ヤオロマツス岳より、往復七時間を要する。露営を最低鞍部にすれば、往復九時間はかかると思はれるはむらむら。

「二」のルート

弘尾線中札内駅下車「札内川上流」の地図に入つて最初の右岸からの水線の沢の手前の涸沢に落ちる。ヘカムイエクウチカウシ山の札内川よりのルートを参照し

この涸沢を溯ると約一時間半で二岐となる。石をとつて少時で尾根にとりつく踏跡がある。これをたどつて地図右端より、一ツめの嶺と二ツめのせせとの鞍部を乗り越し、ヤオロマツス川に下る。

行程約三時間。ここはヤオロマツス川と地図「札内川上流」に入つて、最初の右岸からの水線の沢との合流で、十文字又は赤盤と云はれる。

ここにキヤンスする。

二日目

キヤンス地より対岸にわたると、踏跡があり直ぐに函が始まる。この函及びオ二、オ三と三つの函を天々石岸をまいて約二時間通過する。

オ三の函の中頃には右手からかぶり大さは滝が落ち高くまくか、手前で沢に下り少時で沢から石岸に上る、ここはキヤンスに適している。

一二七八・三木峰へトムラウシ山の直東の曲り目にはオ四の函があり、踏跡は函の途中右岸から入る滝に終るので一目川に下つて左岸にわたりに之を伝う至二時間で再び石岸にわたる。オ三の函から約四時間を経て、少時で左岸にわたりに前はやや河原を作り露営をすることができぬ。

三日目

露営地よりしばらくは左岸を行き右岸にわたる。地函で曲り目の函の次の函が始まるところである。渡つてから右岸を伝ひ約一時間で、裸高尾根の手前で右岸より入る沢を通過し、五四の木の記号地帯をまき終えると、「茂」の字より来る沢が合流する。「ヤ」の字附近に直さは滝があり、その下を左岸に

渡つたところは野営に適する。

滝の上で函が始まり右岸を高くまく。

石岸より沢が入り左岸に入つてしばらくで二岐に達する。しかし左岸のみを歩くことを不可能ではない。ここでペテガリ岳方面への沢が分かれる。水線の沢より約二時間を要する。

河原に乏しく流水に不足しているが、ここにキヤンスするのが適当であらう。

四日目

沢は沢オに迫り合つて膝下状をばして来るが、茂くて、中を歩き得る。一時間で左岸より滝。地函の滝41印はよい。しかし小滝二ヶ所があり、やがて左岸に懸着は沢が入つてからやや行くと二岐より二時間位で雪渓が現れ、石岸は逆Pの一枚岩、左岸は急な崖となる。兩岸は益々迫り陰鬱にして險悪な相を呈する。兩岸切り立てる向を、奔流曲折して泡立ち流れ、通過不可能である。

左岸を二百米ほど登つて大きくまき、流氷から几十米位上のテレスに下る。

まくのには相当の時間要するから、遅くはつたらこのテレスにとまらなければならぬ。

しかし出来れば強行ではあるが次の左岸水線の沢を越して泊るのが露営地を良いし、残さぬに行程のみに去望ましい。

前記のテレスを少時歩いて、地図の「川」と標高尾根との中間付近で沢に下る。

一時間程歩き、滝を左岸踏跡によつてまいた後、左岸からの水線の沢が入る。この辺り沢は比較的開けて河原が続く。

この沢からは一五九を米南方の鞍部に登する水線の沢まで、約三十分程で達し、地図に相違して広い河原が続くから、この間にキヤンスするとよい。

五日目

更に本流を遡ると、コイカクからの沢の合流点との中間から函が始まるが、さほど大きくはなく、大体内をへび回る。三時間コイカクから来る沢との二岐に達し、少し溯つた右岸の傾斜地はキヤンス地と見るが流木は少い。

沢全体は再び一枚岩から成る。少し早いですが、ここに露営する。

六日目

ここから上は函があるが楽に通出出来る。

次に雪溪が着し水は廻れる。細流が着とはつて、丘の崖根から落ちてける二岐の石を行く。

涸沢からやびて藍段状のものとなり、二岐より約四時間で國境尾根に達する

尾根までは沢以外は急な草地で、松や高山植物の群落がところどころにあり、カールを作つてはいはい。七月中旬頃から十勝側に雪溪が残つてはいるが、時期がおそければ水を用意した方がよい。

七日目

ヤオロマツ岳に登る。この國境尾根につけてはペテガリ岳コイカクシユ札内岳よりヤテガリ岳尾根歩きとの項を読みたい。

なお、帰路としてはコイカクシユ札内沢から札内川へ降りるか、ペテガリ岳まで尾根を歩いて中の川へ降りるのが挙げられる。

日高側の登路

「三」のルート

日高側よりサツシビチヤリ川に入るのは夢くればツネ岳、ペテガリ岳のルートとして用いられるが、ヤオロマツ岳を登るために良いルートである。

又一五九七米峰、又はその南の鞍部よりペテガリ岳を往復し、崩りにヤオロマツス岳、一八三九米峰に登つて、コイカクシユ札内岳を登り、札内川に下るのき面白い。

ペテガリ岳の頂「四」のルートによつて、三日目はサツシビチヤリ川の上流、ヤオロマツス岳と一五九七米峰との二岐で露営する。

四日目

ペテガリ岳を登るのほらは「四」のルートに従えばよく、ヤオロマツス岳を向うのほらは、サツシビチヤリ川の最後の二岐より直接、ヤオロマツス岳と、一五九七米峰との間の圏境の瘤より二岐に出ている尾根を登ると良い。

フツシユは例によつて手強いが、七時間で圏境に出られる。

圏境に出てからは、西に圏境を一時向余り伝うと、草原の良い露営地がある。

水は日高側にとらへばはらぬが、相当時間はかかる。五日目

露営地からはフツシユを殆んど無く、ヤオロマツスの頂上迄は岩とお花島の気持の良い登りである。

約一時間半で頂上に達する。

頂上から一八三九米峰へは、空身で往復するが良い。往復七時間。

その日はコイカクシユ札内岳との鞍部か、コイカクシユ札内岳の頂上に泊る。

尚サツシビチヤリ川上流の最後の二岐より左に入つて、床から直接にヤオロマツス岳に登つた記録はない。二岐よりすぐ函となり、上流も相当に悪いらしい。

ルベツネ岳 (一七二七・三米)

ペテガリ岳 (一七三六・二米)

十勝・日高圏境

地図 札内川上流・神威嶽

長蛇の如く南下した圏境尾根は、ヤオロマツスの南で高度がぐつと下り、産不帯をはずすが、更に圏境を南に伝え、又高度は次第に高くなり、やがてこのルベツネ岳に至る。

ペテガリ岳は、この一連の山脈の中心部をなし、頂上附近はお花島と圏谷に取巻かたっている。最も困

難は山頂として取り残され、この頂が、日高測より殆んど尾根伝いに慶恋の人達によつて登頂されたのが一九三二年の夏であつた。

その後相次いで登られ、現存ではその四面の谷も悉く歩かれるに至つた。更に近江山麓に鉦山小屋がたてられるに及び、これの登頂は樂になつた。

しかしこの人里遠き谷に何人かを起せば、その興味は盡きざるものがあり、更に山の奥深く鬱蒼たる森林の向を奔騰する末を期する困難は登路であり、たとえ多くの人達により既にその頂が踏まれたとゆいえ、ペテガリ岳は未だ魅力を残す。

登路としては、本桐或いは静内より入り、シビチヤリ川上流のペテガリ川とベツピリガイ沢との合流にある鉦山小屋まで二日間林道を歩き、これより尾根を登つて一日半にして達するのが最も容易である。國境伝いに北より来るのは、やぶこぎの苦勞が主はそののである。

ヤオロマツス川、中の川、サツシビチヤリ沢、ペテガリ沢よりするのは、難達者ではけねはらぬ。特に中の川は、下りのルートに取る方が有利である。しかし、増木の時にわ下ることができないから、コ

イカクシユサツナイ岳より、札内川え下らなければならぬ。

登路

一、中札内―札内川―コイカクシユサツナイ川―コイカクシユサツナイ岳―ルベツネ岳―ペテガリ岳

二、中札内―札内川よりヤオロマツス川―ペテガリ岳①本流より一五九を米峰の南の最低鞍部に出で、國境を伝い頂に達するもの、②及び頂上直下に発する沢を溯行して至るもの

三、大樹―尾田―中の川―ペテガリ岳―ルベツネ岳
四、本桐―ケリマツス川―メナシヤツ川―コイカクシユシビチヤリ川―サツシビチヤリ川―國境―頂

五、本桐―ケリマツス川―メナシヤツ川―コイカクシユシビチヤリ川―三岐附近より尾根伝いにペテガリ岳

六、本桐―ケリマツス川―メナシヤツ川―コイカクシユシビチヤリ川―ペテガリ沢―ペテガリ岳

十勝側の登路

「一」のルート

カムイエクチカラシ山の札内川よりのルートにし
たがアテ、コイカクシユ札内川に入る。

コイカクシユ札内川よりコイカクシ札内岳、ヤオロ
マツス岳迄は、ヤオロマツス岳の頂を参照されたい

コイカクシユ札内岳よりペテガリ岳までの尾根歩
き

コイカクシユ札内岳頂上よりペテガリ岳頂上迄は
二日半の行程である。

コイカクシユ札内岳より南に國境を伝ひ低い道松
をこいで、ヤオロマツス岳との最低鞍部に達する。

この鞍部は良い露營地とをひる所である。この最低
鞍部よりの登りは、少々道松をこがぬばむらばいが
一七四の木の窟から、國境は急にやせ、岩と高山植
物が奥庄する極めて歩き易いものとなる。

日高側は深い無名沢とはつて落ち、無名沢の流は
深い森のなかめ見えはりが、ヤオロマツス川は広く開
けて、疾風のかがつた沢頭を足元深く見ることがで
きる。

コイカクシユ札内岳の頂上より、ヤオロマツス岳ま
で二時間で達する。

一八三九米峰えの尾根に分れて東に國境線を下る。
頂上より三百米近い下りば、岩とお花島の極めて歩
き易い尾根である。この歩き易い尾根を降り終える
と道松、岳樺、熊笹などが、次第に密生して歩きに
くくはつて来る。一五九九米のピークにつくには、
ヤオロマツス岳より、六、七時間をかかると。

このピークの日高側は、わずかにお花島が存在し、
頂は平らな所があり眺めを良く、露營地として絶好の
ものだ。

水は日高側にサツエビチヤリの裸頭に汲みに行けば
良い。三十分で汲んで来られる。

翌日は南に國境を下ると、アツシユはいよいよ猛
烈とひり、そのひどさは日高國境でも屈指のところ
である。最低鞍部附近が殊に甚しい。樺にはり出し
に樺木の枝は、おした位ではびくともしはり。一本
一本のり越えて歩かねばむらばい。

もし最低鞍部に泊るはらば、日高側に十分を下れば
水を得ることが出来る。

又この鞍部より空身むらばペテガリ岳を往復するこ

とまでできるが、往復十時間を要する。

荷物のある時はこのヤスを通過するに困難を極めるが、鞍部の南の稽に出てからは、手の混んだ着木橋からは一息開放されるが、道松はルヤツの頂上に出るまで行手をはずむ。

ルヤツネ岳近くの國境はやせ、十勝側の傾斜は殊に強い。ルヤツネ岳頂上まで五時間を要する。

ルヤツネ岳からは日高側がゆるくはつて道松をやらすくはる。

ルヤツネ岳の南の鳥からは、下るにつれて歩き良くなり鞍部につく。鞍部附近より鞍部の東にあるカール底に下るが良い。カールバントはゆるく、向処からでそ下り得る。ルヤツネ岳より一時間半と見れば繁である。

このカールはペテガリ岳の三つのカールのうちで最も良い泊り場と見る。

ルヤツネ岳に遺ひ上るアオロマツス川の沢頭の岩壁などは突に見事なものである。

泊るのはこのカールの一盞下が良い。不自由した水も岩の向からこんこんと湧き出ている。

翌日は空身で頂上に向うならば一時間半、荷物を

かついで二時間半でペテガリの頂に立つことが出来る。

即ち鞍部からの登りは、岩が多く危時の良い所である。道松を時々深くはるが、昨日の様は苦斗はそうはい。

次に十勝側に不完全な大きな二つ続いたカールが見えて来る。

頂上の最後の登りは、シヤフナケの身は歩き易い平尻尾根である。

「二」のルート

北太山岳部時移参照

此のルートによるペテガリ岳の登路は十勝側は勿論、日高側を念めに登路の中で最も困難なものである。しかしヤオロマツスの豪社は函わ、又最も素晴らしい、美しいものである。

ヤオロマツスの函わ少しの降雨にも忍び増し潮行は全く不可能となり危険である。

熟達者の万全の用意と、周到な注意のもとに、初めてこのヤオロマツスの核心を探り、目的の頂に立つことが出来るであろう。

此の「二」のルートは、ヤオロマツスの本流より

一五九九米の南の鞍部に出るものと、ヤオロマツス川より分れて、直接パテガリ岳頂下に出るものがあるが、後者は最も困難なものである。

四、ヤオロマツス本流より、一五九九米峰の南の鞍部に出て國境を伝ひ頂に達するもの。

四日目はヤオロマツス岳のルート「ニ」を参照されたい。註一

五日目

本流より分れて一五九九米峰の南の鞍部から来る沢に入る。合流より函状をなすが、中の浅瀬を伝つて抜ける。両岸より押出した小山の稜はテフリをいくつち乗り越えて一時間半をなると一二六六米の北に流れる急な沢が合流する。

此の合流を過ぎ二つ三つ小さは函を巻くと長大な雪渓に出る。七月下旬、雪渓の両岸は高い岸壁である。この雪渓は一軒半を続き、次に傾斜を強くする。一時間半を歩いた雪渓を登ると、雪渓が切れて、溝と化する。雪渓より兎上げる。最低鞍部は非常に低く見え、すぐでさぬ國境に出られような錯覚をおこすが、雪渓の終りから上が案外時間がかるから露骨地は早く出るが良い。雪渓の上は國境まで跨る

急で、山脈の中で最も急な所の一つである。勿論尾根の途中には泊る所をけい。

沢通しは手懸りがよく、この急傾斜面をスツシュにばら下つて登る。

雪渓の切れ目より五時間はかかる。ヤオロマツス川の本流より九時間と見ておかなくてはならない。

國境に出てからは、最低鞍部に泊るのが良い。テントを張る位の余地はある。水は日高側に下ればすぐ求められる。

六日目

此の最低鞍部より、パテガリ岳を十時間で往復し得る。尾根は「一」のルートを見られたい。

帰路は國境を伝つてコイカクシユ札内岳に出るのが良い。

もし中の川を下るか、コイカクシユシビチヤリ川の方にぬけるつもりならば、この日はルハツネ岳を越えて、南の最低鞍部のカールに泊るのが良い。

註一

四日目の露骨となるこの河原に、札内川より一二九の米の粟の沢を乗り越えてきに記録があるが、札内側、ヤオロマツス側共に極めて悪く、ルートとして

は良いものではなし。

ヤオロマツスに注ぐ水線の沢は、本流より数百米奥に、五十米ばかりの大滝がある。

④ ヤオロマツス本流よりパチガリ岳原上直下に発する沢に入つて至るもの

三日目までは、ヤオロマツス岳の登路「ニ」を参照せよ。

四日目

二岐から左岸の順戸の岩を伝い約一時間にて險悪なる函に達す。通過困難で左岸を高くまく。まぐのに二時間要す。まさ終えてしばらくで再び函、これぞ左岸をまく。

これから徒渉をくり返し溯ると、大きな滝にぶつかる。二股より約四時間、直ぐ上に滝を登せる小沢が入つている。ここまでは魚影をみとめ得る。

再び函を一つ左岸をまいて進めば石岸から小沢が入る。ここからはしばらく右岸を伝う。

大滝より三時向半にて容易に右岸をからめる函をこすと、右岸は数百米の岩壁となる。

ここが地図上ひどく屈曲してるところであろう。河相は豪壯にして險悪とほる。

左岸をまさ後は一連の函つづきを川岸を伝ひ或は徒渉し、高くからむ等して溯る。

函の終つに附置でテントを張りうる余地を見つげにひら卓とまらねはむらぬ。

標高七百米附近である。流木は殆どない。

五日目

前の函が終つてから一時間程で、再び暗くて險悪な函。ここは両岸迫り川中二、三米の急流で右岸をまくのに三十分位かかる。

奥に函を二つまいて行くと、伝いかまのような沢の落合に出る。右岸には一四〇五、六米へボンヤオロマツス岳からの水線の沢が滝となつて入り、本流は伝い淵をむす。

キヤンブ地から約三時間、左岸を数丁の向麓下駄の函の上をへするが、函の終りにあるカリーにはばまね川岸に降らねはむらぬ。

マイルでアスカイレンして降る。

ここからは小さく函があるが容易にまけ河相は平明とほり、川底は一枚岩で河原もあり十数丁は自由に徒渉しつつ樂に溯行出来る。やがて右岸から水壘相

当の沢が入る。

ポイヤオ口からの支流より約五時間て再び函。

こゝは左岸の草付をまく。途中の枝沢から更に高きまき、左岸の絶壁が高くびるところで川岸に下る。沢は廊下状をひし、左岸は絶壁、右岸の十米位上は棚状をひしこゝを伝う。

サイルを用いた方が安全である。函が始つてから約二時間てルベツネ岳北肩よりの沢が入る。

こゝより一時間溯行し、左位置の滝の手前左岸の川原は野営地にしつる。燃料はひい。右岸は傾斜四十五度位の大岩壁である。

六日目

七月中旬はらこの附近より、雪溪が現れる。再び左岸をまいて行く。

附近一帯は谷に面して、急傾斜の草付である。一時間程で三岐に達す。此の附近はやや迂回と異なる。

ルベツネ岳の頂上より来る沢と、ペテガリ岳の北肩より発し滝となつて落ちる沢とが、本流と一帯で合し、三岐をひして行く。七月中旬はら残雪があり、本流は向もはく長大な雪溪となり、滝にてきれる。

こゝを、左岸の岩を登つて上に出る。三岐から一時間半である。

直ぐに二岐とほり、左岐は滝の連続をひしてペテガリ岳の頂上より来り、水響やや多き右岐はペテガリ岳東側カール（Bカール）から来る。

両方共溯行の困難は同程度であらう。

左岐をとれば階段状をなして低い滝が連続して、やがて傾斜はゆるくなり、ペテガリ岳直下のカールに至る。

平地をひく良いキャンプ地をひいがかこにとまる。滝からは約四時間を必要とする。

七日目

疾雪を登り樞松をわけて國麿尾根に出て約二時間てペテガリ頂上に達する。帰途ルベツネ岳を徑てコイカクシュサツナイ川に降ることも出来るが、「尾根については「一」のルートを読ませたい。

「三」のルート

中の川よりペテガリ岳に登るこのルートはヤオロマツス川よりの登路と共に一般的なものとは云えぬ。

しかし函の多い沢ではあるが、上流まで魚釣の跡跡が明瞭で減水時には紫外線に溯行できる。

函と河原とが交互に続く中の川は、十勝側の河川の

中でも最も美しい河の一つである。

此の川は溯行するよりむしろ高剛よりの帰路として用いることが多く、川から平野に出る附近の風景は最も印象的なものである。

一日目

広尾線大樹駅下車、バスにて尾田に向シ、帯広から直捷バスにて尾田に行く手を出来る。

国道をはずれてヤオロマツス川にかかつて川を渡ると、廻りヤオロマツス川より外れて中の中の方に向う。中の川を渡渉して右岸の道に出ると、大樹より来る道と合する。

尾田より十軒輿にある最良人家の手前で中の川を左岸に渡り、美しい白樺の林の中の道林道路を行く。約二軒をこの道を通ると、道は中の川の河原に続いている。

末におりてから約一時間後最初の函とむる。兩岸は低く、中は広く、池の様は感じのする函である。

普通は右岸を絡むが、菰水の時は函の真中も水位の深さで通過出来ることある。

この函にすぐ続いて又函がある。これは約五百米位の長さである。函の手前に右より入る小沢を少し入

つて函の左岸の広い台地の上を三十分を歩くと、この函は切れるが、又函とむるのでそのまま左岸の台地を歩いて、六一〇米より発する沢より数えて三本目の沢が右岸に入る対岸ありで沢に下るが良い。この辺は大奇と云はれ、増水のときに河原の石を押し上げると共に砂金が集るので少々呼ばれているのである。オ一の函より約二時間を要する。

これから上約一軒は大奇の函と云はれ、高くははいが函状をはずす。函の左右は溝でさ樂に歩ける。

又右岸の台地の上を歩いてよい。七二八米の泉の沢は地函より約三百米下流で大奇の函の中に合流している。

又六一〇米五、五米と独立標高九三四米より発する本線の沢は、地函よりを相当上で合流しているものらしい。

次の函は右岸を絡む。対岸に相当大きな沢が入っている。

次の小さは函は左を絡み三百米を行くと右より相当大きな沢が合流する。これは地函に記入してはいが、六一〇六五、五と独立標高九三四米との間より発する沢と思はれる。地形図の誤りはこの附近が甚しい。

この合流より三十分はかり河原を歩くと右岸より割
に水響の少い沢が入つてくるが、これは北三四米と
△九八九、五米との向より流れる沢でこの合流は二
岐と云われ続けている。この附近は美しい河原が続き、
甲の川の中でも最も良い所である。大奇より四時向の
行程であり、何処かよいテラスを見つけて泊る。

二日目

露営地を出て美しい河原を歩くと三つ連続する函
とほり、左岸、右岸、左岸と絡むが、踏跡は明瞭で
ある。これを通ると又平坦な明るい河原が続く。
地函神威岳に入つて始る甲の川の記号のあるところ
はむしろ容易に通れる。

「中」の字附近の石岸の小沢は、ユルジュ状の明瞭
な沢である。

三つの函より二時向半である。約三十分にして又函
、石を捲く。川の字附近である。

この附近は函と函との間は歩き良い河原が続く。
沢々に西は迫つてきて一時向半位で中に滝のかかっ
ている函に至る。これはS字状に曲つて居り左岸の
踏跡をたどる。これより約二十分で一・二九五米独立

標高よりの沢が地図上水線二岐に合流して三岐をな
す前に達する。

真中の神威岳より来る沢は約二米ばかりの滝となつ
て深い滝壺の中に落ちこんでいる。

ベテガリ岳方面への沢には、この三岐より上に良い
露営地がほゞから三岐附近で泊る。

三日目

向つて石の沢に入る。

これより上は沢に悪くはるが、減水の際は割に早
く通ることが出来る。最初の函、沢の函は夫々石岸
を捲く。続いて三つ目の函である。この函は兩岸と
右オーバーハントをばし、巻くのに相当の時間を要
する。右岸岩壁の直下より斜に入る種かの割目を登
り、更に出尾根を登つて、右に急な草地をまき、一
旦フツシユに入つて、再び急傾斜面を横切る。快イ
ルで確保する方が安全である。

登りには一時間余りを要する。

この函を下りには泳ぎ下ると僅か二・三分で通過す
ることが出来る。沢に滝の二段連続して落ちている
所は左岸をまく。

テスリの跡を辿き、小さな函は右岸をまく。

左岸より枝沢が入る。地図上八百米の字附近である。この枝沢の上流は約百米の滝とほつてゐる。

この函は石岸を捲く。これを過ぎて次の函は石岸をまき、約十五分で河原に出られる。これより二十分で八四〇米の二岐(上二岐と云ふ)に達する。三岐より増水してはいない限り、六、七時間を要し一日行程であるが、下りには面倒な函を泳ぎ下れば三時間程で三岐まで行ける。

上二岐附近に露骨するときば、不意の増水に充分の注意が必要である。

四日目

上二岐より國境に出るには、左石の末は極めて悪いため入らずに、直接合流点より尾根に取付いて、尾根を伝つて國境に達するがよい。

尾根上は露骨地が無く、千三百米附近の平坦地が唯一のものである。

(註)

水を得られぬから一日分の水は、上二岐より持参するがよい。國境より上二岐に下るときには左石の末は頗る困難だから、尾根上を忠実に伝つて上二岐まで出ればはばらぬ。上二岐より國境まで八時間

下りば三時間である。

五日目

國境より上二岐への下り口には、降る人のために、わづかほがら判分けがつけられてゐる。パテガリ岳との間の國境の曲り目迄のスツシユは中々手強く尾根を一部極端にやせてゐる所がある。尾根の曲り目まで二時間半。ここより尾根は比較的楽に下るが、這松に時々足を取られる。

日高側は割とゆるい這松の斜面であるが、十勝側は不発全がらカールがある。

このカール底は平坦所が殆どなく、良い野営地ではない。

頂上の手前の日高側に觀着は尾根が出て居り、頂上より降る所には、ときに國境と間違えることがある。頂上まで尾根の曲り目より一時間で達する。此の日は國境を北に伝つてルヤツネ岳との最低鞍部の東にある小ざりが美しいカールに泊るか、日高側に下るならば頂上より西に出ているツツシユピチャリ川の支流まで下つて泊るがよい。

(註)

北大山岳部報六号参照

奥に十五分で約六米ばかりの滝があるが、右岸を簡単にまくことができる。

角をこえてしほらくすると、ヤオロマツブ岳との二岐につく。三岐より左時向近くを要する。

増水時ならば奥に時向を要するから、日程から云つて、前日の露宮地は出まらぬだけサツシビチヤリ川に入つておくが良い。

四日目

石の沢に入る。二百米を入ると、河原はつきて、沢は一枚岩となるが、大きな滝はなく、殆どまかなくすむ。

最低鞍部より来る沢へ大きな雪溪の上に高く着はつて落ちる沢のあたりより本流には大きな石が積重なり、カウカウした南けに所に出る。

二岐より一時間半、此の附近より、尾根に取付いて國境の最低鞍部に出てよいし、最後まで沢をつめて一五九米峰に出るを良い。

後者の方がツシユは比較的少なり。共に二岐より八時向近くを要し、一日行程である。

五日目

最低鞍部又は一五九米の稜上より國境を伝つて

パテガリの北のカーレルに到り。

六日目

ヤテガリ岳、尾根は「E」のルート尾根の頂を参照せよ。

註 1

この林道はパテガリ沢を対岸に渡り、パテガリ沢の右岸をベツピリカイ沢合流手前にある鉱山小屋にまで達している。

註 2

コイカクシユシビチヤリ川にサツシビチヤリ川の合流する地点は地図と異なり、実際はコイカクシユシビチヤリ川の「リ」と「川」との向に入っている沢の約五十米上流である。

この「リ」と「川」との向に入っている沢は古くはパテガリ沢と呼ばれていて。

註 3

この沢はサツシビチヤリの合流より二百米を入ると函となり、通過困難となるが、上流は極めて歩き易い。

註 4

この沢から一八三米峰に登った記録はある。

しかし、標石まで沢を登る事は難しく、尾根のスツシユをこいで登らなければならぬ。

記録によれば十二時向以上を要し、合流よりは強行である。頂上に登るルートとしては佳めらぬ。

註5

この沢に入つてルベツネ岳に出た記録もあるが、本流より分れるとすぐ種上の滝となり左の頂上より出ている尾根に逃げざるを得なくなる。これに十二時向以上を要し、困難である。

注意

このルートを通つて國境に出て、食料その他の都合で早く十勝側に出たいと思つときは、コイカクシユ孔内岳をへて、孔内川に下るべきである。ヤオロマツス川は帰路にはとらぬ方が安全である。

「五」のルート

このルートは沢歩きは殆どなく、尾根を主に歩くので、日高の山のルートとしては興味少いが、最も早く頂上に立つことができるし、又増木の時の日高側への迷道として考えておくがよい。

ヤテガリ岳の「四」のルートの項にしたがつて三

岐附近に達し、又はそのルートの註1によつて、ベツピリカイ沢合流附近の小屋より、直接ヤテガリから西に張り出ている尾根に取付く。

尾根のスツシユは比較的樂で一日で一二五六を越え東の鞍部附近より北側のサウシピチヤリ川支流に下り泊る。

翌日は空身ならば、頂上往復を樂であるし、荷があつては、ヤテガリのどのカール迄も一日で樂に行ける。沢は標石まで極めて歩き易い。

「六」のルート

北大山岳部報六号、北大山岳部時報二十七号参照
このヤテガリ沢より登られた記録はたゞ二回のみであり、元洞川よりベリカイ山を越えてきたものであつた。最近ヤテガリ沢に針山ができ、更に簡單な「五」のルートが變くとりゆるに反んで、あまりかえり見られなくていはいが興味あるものであり、中の岳へのルートとしてご利用され得るものと思はれる。ヤテガリ沢とベツピリカイ沢の合流處は實際はつたと上流で、地圖上の合流處の南の水線の沢の地處が其の合流處である。

ペテガリの「四」のルートによつてベツピリカイの合流卓までは二日を要する。

三日目

合流卓より五百米を河原をつたうと、沢は直前に北上し、これからは猛烈な函と滝の連続となる。左岸の壁を約二百米近く登つてへづらなははらなは。まき終つて沢に下つてしはらくすると、又大きな函にぶつかると、これは左岸を高くまかぬははらぬ。地図上ペテガリの「テ」の字あたりに沢に下る。まき終つた所は美しい河原である。この河原に野営する。ベツピリカイ合流より八時間。

四日目

五十分ばかり歩き易い河原を歩くと又函がある。左岸のガレを百五十米位登つてからトラバースするがよい。この函が終ると沢はぐつと南け美しい河原が続いている。五六〇米附近に左岸より大きな沢が入つて来る。河原になつてから一時向はかりの所である。この合流より三十分で國境野郎からの沢と、ペテガリ岳より直接出る沢との二岐につく。この附近に露営。

五日目

二岐を左にとつて進むとやがて、沢は滝の連続となる。滝を右、左とまいているうちに、最後は尾根をそのまま登ることになる。頂上まで十二時間の強行である。

中の岳 (ルートルオマツ岳)

(一六〇二米)

十勝・日高國境

地図 神威岳

中の岳は、ペテガリ岳と神威岳との中間に位し、頂附近に少しばかりのお花畑と、小さな沼を現出する外、その山脈はすべて手強い番松と熊笹におほはれしかそ周囲に広がる沢は、いづれを険悪する函と滝とをまつている。

その為かこの山の頂を訪ねたものは、未だ三班を数えるのみである。

この辺の地図には信用し得ない部分が多いから、登山の際には予め充分調べておく必要がある。

登路は、中の川、ニシユオマナイ沢、ベツピリカイ沢といづれをとつても、相当の経験者でなければ

危険である。南北向の側の国境を灌木類が密生して、通過は困難である。

登路

一、尾田—中の川—中の缶

二、静内又は本桐—メナシベツ川—コイカクシユシ
ビチヤリ川—ペテガリ沢—ペツピリガイ沢—中
の缶

中の缶は頂上までスツシユがあり、いづれの登路をとつても、最後は猛烈なスツシユと斗わねばならず、頂上への沢も、いづれも最後が悪く、容易はルートでは無い。二つあけにルートを一般的のそのではない。

十勝側の登路

「一」のルート

十勝側より中の缶に登らねたのは、中の川の三岐より神威缶への沢に入り、約一軒上で、左岸より入る末を越り、頂に達した記録が唯一回あるのみであり、三岐より四日の苦斗の末登らねたのである。この中の缶の南に発する沢は、中の川の合流より函状をなし、上は極めて悪いから、途中より左岸の尾

根に登つて、猛烈なスツシユを潜るははら無い。又中の川の上三岐へ八二の米より頂上への沢は、日高側よりの峠路として用いられたが、頂上より上三岐まで一日半を要し、極めて悪い沢なので、これを良いルートとは云えぬ。

この山を十勝側から登るには北大山缶部報四、及び七を参照の上、万全の準備と細心の注意をもちてのぞむべきである。

日高側の登路

「二」のルート

日高側より登らねたのは元浦川よりシヨシベツ沢を溯り、ピリガイ山を越えて、ベツピリガイ沢に下り、この沢を溯つて頂上に達したものである。(北大山缶部報四号参照)

しかし現在ではペテガリ沢と、ベツピリガイ沢の合流まで、メナシベツ沢に沿つた林道が延びているから、この林道を用いた方が容易である。ベツピリガイの合流までは、ペテガリ缶の頂のペテガリ沢よりのルートを参照せられたい。

三日目

合流よりハツピリガイ沢に入ると沢は極めて歩き易く、ピリカイ山より来る沢の合流まで、途中小さく凹みがあるが、容易で約二時間半にして達しうる。ハツピリガイ沢は、ここより涸沢が多く、足持良く歩かぬ。

二つめの水線二岐まで涸沢は続く。この二岐では、左の沢には水があるが、右の方は涸沢である。合流より二時間、左の末に入る。五百米の所に最初の滝がある。右を巻く。この辺より沢はぐんと急にひろる。六八〇米附近の二岐には、大きな雪渓が残っている。相当の傾斜である。本流は滝、右と同じ。ここより末通しの漸行は困難とわかるので、どこか良い所を見付けて露営する。ヤテカリ沢の合流より八時間。

四日目

今日の行程では水に不自由するから、水の用意をしておくが良い。雪渓の左より尾根に取付いで、スツシユをこいで、上へ、上へと登る。この日は千三百米附近の尾根上に露営する。

五日目

この日も引籠りて尾根上のスツシユをこぐと、尾根は次第にやせて来る。沢は尾根近くまで通じ上って、ハツピリガイ沢の上流から集る水をくむことが出来る。この尾根を伝うと、尾根は左折して、世の茂った尾根に合する。

頂上附近の地形図は誤っている。即ち頂上の北より稜西に出ている尾根（登っている尾根）は中の岳南西方標高尾根の数字一五〇〇のあたりで、この標高尾根に合して、中の岳に劣らぬ高さの積を作り、この中との岳との間には鞍部があり、標高尾根の東は、國境との間に、広くゆるい斜面をなしているのである。

頂上は約千三百米の露営地より猛烈なスツシユをこいで、約六時間で達し得る。

頂上からの十勝側へのルートは、頂上より直接下に下るのは、いづれの沢を下つても、極めて悪く、とらぬ方が安全である。

十勝側に下るならば、尾根を直接三岐まで下るか又は一四三三米の頂を登り、尾根通しに中の川に下る

十五の内

が良い。

ペテガリ沢の上流は極めて急である。ニシユオマナイ宋を下るのは、頂上よりしほわくは、平々玄い笹原をこがねははらわいが、沢はせね程悪くはない。しかし、ニシユオマナイ沢の中流は、これ又險悪である。

神威岳

(一六〇〇、五米)

ソエマツ岳 (一六四六米)

十勝・日高國境

地四 神威岳

南日高の中心をなすこの神威岳は、その名自身、美、偉大、恐ろなる意味を有し、古くから人々を引きつけずにはおかなかった。

古くから、この偉大なる山の懐に抱かれようとしてを試みた者は多かつたがいづれも成功せず、昭和五年に、北大山岳部相川氏等によりマピナイ川より、クソエマツ岳を至り始めて登頂された。以後中の川、ニシユオマナイ沢、ソエマツ沢から神

威を訪れた者もあるが、前二看をいづれも非常なる困難を越えてなされたものである。

比較的良い登路として、ソエマツ岳とマピナイ川があけられる。

ソエマツ岳とは、神威岳と伺い合つて独立標高一六四六米を云ひ、地四では、ほんの標の如く見うけられるが、その山容は實に立派で神威に続く山としてふさはしい。

登路

- 一、大樹―尾田―中の川―神威岳
- 二、大樹―尾田―マピナイ川―ソエマツ岳―神威岳
- 三、狭伏―元浦川―ソエマツ沢―神威岳
- 四、狭伏―元浦川―ニシユオマナイ沢―神威岳

十勝側の登路

「一」のルート (北大山岳部報七号参照)

広尾樫大樹跡下車又は帯広より直捷バスにて尾田に至る。尾田より中の川を溯行して三日目に六二〇米の三岐に達するが、中の川の詳細はペテガリ岳の中の川すりのルートを参照されたい。

三日目

六二〇米の三岐の中央の沢は神威岳に発するもので、約二米の滝が、小さな函の中に落ちている。この滝は右手を簡単にまける。この滝を越すと河原となり歩き易い。

約四十分も河原を歩くと左岸より沢が入ってくる。註¹ この二岐附近の本流は河原であり、ソエマツ岳が正面に高く仰がれる所である。

二岐より十分ほどで小さな函があるが、兩岸共に谷み得る。それより約一時間ソエマツ岳より来る沢との合流に達する。この合流より本流はゴルジュ状をひいて急に悪くなつて来る。

すぐに小滝が二つあるが、丘、次に石をへする。暗い函がきけると右岸より滝をひいて、水量の多い小沢合流し、更に滝を一つ越える。

沢が急に曲り、再び函となる。ここまで三岐より約一時間を要し、且ここが唯一の泊り場となる。

四日目

函の入口に大きな滝があり、左岸をまくがよい。沢の二つの滝を左岸をまく。

沢は左に曲り滝、函が始まる。この函は両側オーバ

ーハンタで滝がある。

右岸の草附に取付くが、ここは思いきつて高くまく方がよく、対岸の長大な滝の沢が見えてから下る。露営地より二時間半。沢に下り少し行くと、左岸より殆ど木霊の同じ沢が入つて来る。

ここより本流は滝が連続している。急ピッチに登り出す。千二百米の二岐の左の沢は非常に高い滝とみつけている。

その滝の右岸に登り、沢を登りつめると、殆どスツシュをこがすに神威岳頂上に達しうる。露営地より約六時間の行程である。

注意

このルートによつて神威岳に登るのは、増水の時には危険であり、又荷物の重い時には細心の注意を私ねたい。

註¹

この沢を溯り中の岳に達した記録もあるが、沢は全く悪く通達は困難である。又尾根を再び岩登りヒリ、且スツシュにも苦しめられる。中の岳への登路としては、崖はぬ方がよい。

「二」のルートへ北大山岳部報並神威岳参照し
又ピナイ川又は大榎村尾田で三つに分れる。曰方
川の南端の支流である。かほり上流に到るまで広い
河原を占め曰方川の他の二つの支流とは異つて河相
を持つてゐる。

しかし、上流には悪い函があり、北日高の多くの川
の様に简单には尾根に出らぬ。

又ピナイ川よりソエマツ岳、神威嶽へ
一日目

広尾線大榎よりバスにて尾田に行き曰方川を渡る
。又ピナイ川に沿う南墾地の自動車道路を行く。

地図上豊似に入つて橋を渡れば、道は向をばく細く
なり、ペンケヤロナイ川合流から始まる函の入口で
河原に消えてゐる。尾田から約三時間

対岸に渡り道を探せば、踏跡は函の終りまで導いて
くぬる。ここでわらじに替え、巾が広くて中洲の多
い河原を三時間を行けば四四〇米の二岐に出る。

道より約四時間。中洲はうっそうと木が茂り、流木
も豊富でよいキャンプ地である。

この川の河原石は滑り易く、同じ様な河原であるが、
札内川より歩きにくい。

二岐はどちらの沢も同じ位の水量であるが、川中は
地図と異り南側の支流の方が広い。

二日目

二岐を右にとり、一時間ほどを広い河原を進めば
中二岐につく(次の水線二岐)

右の沢は小さいから見落す事がある。更に一時間で
河原は切れて天は急に狭り滝と化つてゐる。

此函神威岳に入つてから二本目の沢に入る附近、又
ピナイ川と書かれてある部分が連続して滝のかかる
函で、かほりの憩場である。右岸を約三時間をかけ

てまく。「註」
まき終えてから一時間程で上二岐に出る。ここは地
図上八八〇米の三岐であるが、実際は二岐で、左の

沢は二段の滝となつて合流してゐる。
荒涼とした感じの所であるがピクカヌスリとソエマ
ツ岳とが頭上に望まれる。

これより上にはキャンプ地がはなから、尾根に出る
には、ここで泊らぬはむらぬ。

三日目

右の沢に入ればやがて左手が滝となつて二岐とな
る。この滝から上は滝が連続するが、巾を通越する。

次の滝の二岐を左手に登ると水がはくはり、ソエマツ岳南方の尾根に出られる。

鞍をこえ、お花岳を登つて、上二岐から五時間マツ岳に着く。神威岳スツシユの密生しにやせ尾根を行けば、四時間程で心持ち平になる。

最低鞍部えの下りである。どちら側にも急峻であるし、沢に下りておキャンヌは出来ぬから、この辺のスツシユを私つて右るがよい。重荷を引つて千米を登るのは、この日ははかばかつらい日である。

四日目
普通はここから神威岳を往復する。伍棒や置松の密生しているやせ尾根は意外に少時間がかかるが、四時間程で頂に達する。

「証一」

この悪場をさげるために、増水時又は国境からの降路としては、国境から中の川との分水峯の尾根を歩き、一二三五、五米をこえてから直接に中二岐に下るルートがとられる。

一日半から二日を要する。

時間はかかるが増水時に晴にはこれより他に道はない。

日高割の登路

「三」のルート

このルートは神威岳及びソエマツ岳えの登路の中では比較的楽な方である。

一日目

日高線狭伏の駅よりバスにて元浦川に沿つて約一時間、元浦川の広く発達した気持の良い段丘の上を走ると上野深に着く。

途中より北の空に神威岳、ソエマツ岳の鋭い頂が遠く遠まねる。

上野深より、右岸の馬車道に沿つて進むと、地形図「西金」の切目の附近より道はいよいよ農地より森の中に入る。

オソウシナイ沢の合流より少し下で広い明るい河原に下り、更に約二十分を歩くと林道は左岸に上つてゐる。林道は等高線に沿つて川より五〇米近くまで上つて一旦下り、シヨロカンベツ沢を渡つて、又元浦川の左岸のテラスの上をソエマツ沢合流までついでゐる。ソエマツ沢までは上野深より約七時間の行程である。ソエマツ沢を溯るならば、林道の終点近くに、又シヨロカンベツ沢より、ソエマツ沢に乗越

すなはち、その沢に時間の許すかぎり入つて泊るとよい。

二日目

ソエマツ沢を元浦川との合流より、スツカシナイ沢合流までは函が連続しているが、減水時には中を通りうる。この函を通越するには元浦川の合流より六時間を要する。

普通にはシヨロカンハツ沢を溯り、七三五米の東の鞍部に出て、標高尾根の東の沢を下り、ソエマツ沢を下るルートをとる。シヨロカンハツと本流との合流点附近よりソエマツ沢に降り立つまで八時間を要し、時間は少し余分にかかるが、増水の折はこのルートをとつた方がよい。

三日目

露营地よりパンウラカワ沢近くまでは沢は樂で一時間で進む。この沢の合流の少し手前より函が始まり、函が切れて河原になるまでは四時間かかる。この函は増水時では限り中を樂に通越出来る。函が切れてからは川は急に開け至る所良好な露营地が存する。

函の終りから、この歩き易い川原や砂原を伝つて、五百米の二岐までは二時間半で進し得る。

この二岐附近に野営する。

四日目

野営地を出て約一時間で、神威岳とソエマツ岳より来る沢の合流につく。

南日高の雄峰神威岳に続く沢として珍らしく濶が少々樂な方である。

神威岳を空身で登るならば、此の二岐附近より往復可能であるが、十二時間以上かかるのは覚悟せねばならぬ。荷のある時は、國境に達するに約八時間内と見なければならぬ。

二岐より神威岳又はソエマツ岳を登るには、夫々右、左と入り沢伝いに登つて行くが、沢は雪溪、滝、函と次第に悪くはつて約九百米位の所から尾根に逃げざるを得なくなる。國境より出ているこねらの尾根は非常にスツシユがひどく、所によつては岩が露出している所もあり、途中で泊るのほさけに方が良いが、國境に出てお一部を除いては、すこぶるやせに尾根であるので、注意せられたい。

一四五〇米の嶺の西斜面に稍良さ相好所があるきり

である。國境に出てからは、尾根の手強いブツシユと取組んで頂上に達する。

「四」のルート

一日目

荻伏からは「三」のルートにしたがつてソエマツ沢合流附近で野営する。

二日目

ソエマツ沢合流より、ニシユオマンナイ沢に入ると両岸は立つてゐるが、中は美しし河原が横いて一時向を歩くと約十米の見事は滝とほつて、西オマンナイ沢に落ちるシヨシヤツ沢合流につく。「註一」本流はこの合流より小さは函とほつてあり、次いで高さ七十米中百米にさきする大きさはガレが石岸にあるが、減水の時はいづれに行ける。

このガレを過ぎてからも困難な所はひくせりガイ山の東より来る沢との合流につく。この沢は合流近くで二段の滝とほつてゐる。

シヨシヤツ合流より二時間半である。

ここより本流は函の連続となる。ここはこの沢の中が一番困難な所である。西岸は高くせまり、函の淵は青く、中は通れそうもない。左岸をまかぬはなら

ぬが、斜面は急で相当高くまかざるを得ない。

増水時は沢の大きさは二岐近くまで巻きつづけはげればならぬだろう。この附近より上流は地函は全くあてにばらぬいから注意せられたい。

神威岳の頂上より西に出ている尾根の八八八米の北を流れる沢は、七八四、五米の真北あたりで本流に入つてゐる。

この合流附近まではシヨシヤツ沢合流より良い露営地はない。

この日はこの二岐に露営する。この日は十二時間近くの強行である。

三日目

露営地より本流を溯ればすぐ石岸より沢が入つて来る。この沢を越すあたりより又函となる。本流と八八八米の北の沢との向の尾根は地函とは異り、合流より約二料ほどは沢に平行し、高さ二十米位で天と沢の距離は二百米位に過ぎない。

尾根の上を歩くか又は右の支流に入つて、上流で本流に越してを良いだろう。

本流の函は三時間とするとやつと急に歩き易くなる。函がきけると、すぐ石岸より木畧の多い沢が入つ

てくる。この附近より沢はますます打崩け、兩岸は
はじらかて河相をまにあびやかである。

七二〇米の東より来る沢までは函の切め目より二時
向。更に歩き易い河原を二時間を行くと、兩岸がせ
まつてき、沢が二つに分れる。

ここが中の岳より来る沢との二岐である。左の沢は
入口からせまく暗い感じの前である。

石の本流に少し入れば良い露管地があるので、ここ
で泊る。

四日目

露管地より石の沢は少しづつ急にけり、河原の石
も及々に大きくなるが歩き易い。

二十分をすると神威岳直下から来る沢が合する。
この沢の上流は兩岸絶壁をけし先づ登れまい。

左の本流に入ってから約十米の滝があり、登るには
注意を要する。この滝をこすと沢は階段状となり、

しびきをあげながらどんどん高度を高めつるが、最
初は左右いづれかの尾根に取付き、スツシュをこし
で國境に達することになる。

中の岳の二岐より六時間を要する。國境に出てから
は、神威岳のみを登るならば國境のスツシュを切り

開いて泊るか、又は一四三三米峰の素晴らしいお花
に泊り頂上を往復するがよい。

一四三三米と神威岳との間の尾根は一四三三米附近
を除きスツシュは手強く四時間を要する。「註」

國境に出て神威岳、ソエマツ岳に愈々登り始める。
附近の國境上に泊るがよい。

水は十勝側中の川源頭のお花島の清流に樂に求めら
れる。

「註」

「註」
シヨシヤツ沢よりピリガイ山を越えて、ペツピリ
ガイ沢に乗越すには、途中に一泊する要があり、沢
は入口で滝をけすだけで、あとは比較的良い。

「註」

神威岳より十勝側に下るには、ソエマツ岳を至て
東の尾根を伝つてヌピナイ川に下るのが普通とらね
るが、一四三三米より東に出ている尾根を伝つて、
中の川に出ることとできる。神威岳の北から中の川
へ下るまで強行ではあるが、一日行程である。

一四三三米の南斜面は素晴らしいお花島で頂上に池
がある。

ヒリカヌブリ (一六三一・六本)

地函 神威岳、西舎

地函神威岳にて國境線の最南の三角点を云う。

國境線上に三百米までの高距を示す独立峰は、日高に於ては、このヒリカヌブリ以外にはない。

次に登路をあけぬは

又ピナイ川本流期行は尾田より五日、又ピナイ川支流並に着別川からは沢頭が悪くしかも尾根のフツシュは猛烈である。着別川によれば西舎より四日を要する。

リエマツ末からするぞ、かはり阿ルバイトを強要されるだろう。

上野塚より四日の行程である。

登路

- 一、大樹―尾田―又ピナイ川―ヒリカヌブリ
- 二、幌別―西舎―着別川―ヒリカヌブリ

十勝側の登路

「一」のルート

広尾塚の大樹駅下車、バスにて尾田に行くか、帯広よりバスで直接尾田に至る。これより又ピナイ川を解り上二岐に達する。(神威岳、又ピナイ川より登路参照)

三日目

上二岐で滝とびつて合流してゐる丘の沢に左岸をまいて入る。とどころに小滝がかかっているが、にじしたこともなく、四時間も登れば水はなくなり、其後は溜沢を一時間程登りつめてヒリカヌブリの頂に出る。

註

又ピナイ川四四〇米二岐より南に入る支流をつめてヒリカヌブリに出る手もあまり良いコースではないが可能である。二岐から二時間地函上函印の所までは、本流同様広い河原が続く。函印の所で沢は急に迫つて滝をなし、その青藍色に泥んだ瀧壺には石岩より小滝がかかり、周囲の雪の様な岩にうつつて美しい。

これよりは函の連続となりよいキヤンス地はない。暫時は白い岩の明るい沢である。

河岸の岩の傾斜はゆるく水量は少いので歩き良い。四時向程で八二〇米岐。左の末は広く兩岸は岩で切り立つてはいるが、中は河原で歩き良い。しかし最右はそのすごい滝の連続とほるだろう。

右の末は左岸の岩を削つて流れこんでいる。これぞ上流はかほりみどいものである。ここより尾根に取付けは國境まで一日半を要する猛烈な熊笹の藪である。

國境上一五一三米からピリカヌスリを割合に歩きまし。四時向程かかる。

「二」のルート

春別川は西舎で三つに分れる幌別川の本流とそ見まされる川である。

函が多く、兩岸は切立つに暗い感じの沢であるが、かなり奥まで林道が入つていて、割合に短時間で國境に出られる。

一日目

日高線日高幌別駅に下車すれば、バスが西舎対岸の杵臼まで連絡してはいる。西舎から非常によく管理されてはいる牧場の中の美しい道を行けば、約六軒までは三岐となつてはいる。地図西舎の春別分岐を八て

尚暫時は自動車の通る道である。

川沿ひのテレスの道は途中左岸に渡り、ルテンヤツ沢合流の約一軒上流の最奥人家までついている。

これより奥は細い道が岸に移り、地図西舎と神威岳のつなぎ目の一軒下流から始まる函の入口までついている。

西舎から道の終点まで七時向。暗い林の中の細い道は注意してはいないと時々見失つてしまふ。

河原におりては良い干ヤンヌサイドははいから、そのままテレスの上に露宿する。

二日目

道の終点から始まる函は、中を通らないが、幸に西岸にテレスが発達し、笹を膝程の短いもので歩き易い。

初めは右岸のテレスを行く。向をなく行話つて末に下れば、函はまだ歩いてはいるが中が歩ける。

左岸七一八米北側の末は三八〇米二岐の二、三百米下に合流してはいる。

この二岐まで函の入口から約四時向。この辺は河原もあり流木も豊富である。次の四六〇米二岐までは徒歩をくり返す二時向の末歩き。

ここより上にはよいキャンパス地はない。

三日目

これから左の沢をつめ、ピリカヌリの南の鞍部から来る尾根にとりつく。一回の配線があるのみだが、途中急斜面の鞍の中に一泊、次の日の午頃に頂に達してゐる。又二岐に一五一三米から下つてゐる標高尾根を登れば、これを一度の記録であるが、左程の鞍こぎをなく、約八時間と國境に出ている。

しかし國境線には恰好なキャンパス地が見つけれない。いづれの道をとるも今日は満足な場所に泊る事は難しい。水や飯は充分に用意して登らねばならぬ。

四日目

一五一三米からは、ハンの木と道松と倉弱は赤花島の交互する尾根を歩いて頂上に登る。約二時割合にはかどる尾根だといえよう。

帰路

帰路としては「一」の登路又ピナイ川を下るのが最も妥当であろう。

春別川はその險悪は沢頭から考えて降路には向かぬ。

特に静水の際には絶好に歩かぬはい。

ソエマツ沢に下るのを良いが、これは春別山との鞍部より下るがよく、直下沢に下るのは危険である。

野塚岳 (一二五三・二米)

地図 樂古岳

地図樂古岳中最北の國境三角点を野塚岳と云う。

日高山脈をここまでくれば獨特の奥深さと荒々しさは感ぜられぬ。

この山は標高の低いにぞ拘らず、頂附近のゆつたりとした尾根はお花島に被れば中央高地の尾根を思はせる優しさがある。

上豊似から豊似川をつめてき、野塚から野塚川を伝つて二日行程。西舎か新様似から、二オヤツ川を登つて来れば二日半、どちらか樂は沢歩きである。

春別川の支流ソガヤツ沢から登るには西舎から三日半を要し、途中大きな滝があるので一般的ルートではない。

登路

一、石坂―上豊似―豊似川―野塚岳

二、野塚―野塚川―野塚岳

三、幌別―西舎―春別川―ソカハツ沢―野塚岳

四、稜似―新稜似―ニオハツ川―野塚岳

十勝側の登路

二つの登路はいづれを歩き易く、人家より一日半で國境に達しつゝる。

「一」の登路

豊似川は中流に大きな函を持ち、上流を野塚岳より発するものを除いては非常に険悪は稜相を呈している。しかし立派な道がかはり奥迄通じているし、野塚岳に登る沢を容易であるから、登路としては樂ひものである。

一日目

尻尾線石坂又は豊似より上豊似に至り、これより豊似川に沿う道を行く。

道は初めは石岸を行き、兩岸から標高尾根の落合つ附近で左岸のテレスに沿つて四三一米の二岐までつづいていく。

この日は道歩きに終るだろう。河原に下り、適當な

所に露營する。

二日目

沢を左にとり、平仄は河原を二時間を行けば、五二〇米二岐につく。左岐に入る。

高きはどんどん増すが、これと云う函を淹まぬ。水量の多い方を強んで行けば向もなく涸沢となる。スツシユを分け約四時間で野塚岳西方の野部に出る。二十分位でマヤマハンノ木の下に三角桌を見出すだろう。

「二」の登路

野塚川は上流まで広々とした河原で明るい沢である。稜性のよい若木がすくすくと延びている中を、流はゆつくりとうねっている。

一日目

尻尾線野塚から川に沿う道を歩き駅から三時間位で、死面上の道の終点より沢に入る。

河原石をどび、茂の徒渉をくり返す。頃あひを見て青じその茂るテレスにキャンブする。針葉樹はあまり見かけない沢である。

二日目

四〇〇米二岐までは河原が続く。左に入り次の水

線二岐を右にとる。夫はせまるが函といふ程の手を
ひき。水線の切れめの二岐は右に入り、最後は尾根
に取付いて登る。

隣境に出れば奥にゆつたりとしたお花畑で、これが
一三〇〇米の尾根かと想うほどだ。

丁度日暮れる頃にはなるだろう。頂上をば三十分程
である

日高側の登路

十勝側の登路に較べ日暮そかかりやや困難である
。特にソカベツ河からのルートは良くない。

「三」の登路へ北大山岳部報五号年報参照し

一日目

日高線日高幌別駅下車西舎までバスの連絡がある
。西舎より春別川に右う道を歩き、ソカベツ沢合流
で右岸の道より沢に下り、ソカベツ沢に入る。

この辺は尾根がせまり台い陰うつは感じがする。へ
ピリカヌブりの春別川よりの登路参照し

近年この沢に、これより約四軒奥まで林道が入つた
と云うが明らかでない。

暗い沢に三時間程わらじをぬらせば函となり、滝が

ある。

この位置はソカベツ沢のガの寺附近、ヤマベそこの
滝より上にはいらない。附近の川岸にキヤンブする。

二日目

小さは函を右に左に捲きながら、五時間を行けば
地固は神威岳に入る。ここにはかなり悪い滝があり
左岸草附の急斜面を高くまく。

クイルがあつた方が安全である。滝をこせば一日を
終りに進む。

三日目

平反は沢に一日を越せば、地固は三度委つて樂古
岳に入る。水凍を程近い。上流にはホスリがかなり
見つけられ雪崩の猛威を身近に感ずる。

四日目

一〇〇〇米附近から尾根にとりつき野塚岳真西の
コヌを越えて約五時間で頂上に出られる。

「四」の登路

幌別川の支流ニオベツ川は入口に二つの函がある
だけで一般に明るく歩きよい沢である。

一日目

様似から新様似を至て自動車道路はメナシユンハ

ツ川に沿ひニオヤツ合流より三杆程奥まで入つてい
る。氣をつけて行かぬととんど道を見失ふ。道を見失
ふとオヤツ川を見失つてしまふおそれがある。道を見
失つて道に入れば十分程で道と合流する。右岸をま
すぐに次の函。左岸をまき道から三杆程で五四五
米東方の二岐につく。この左岸から入る沢が、シロ
チーミ沢と云はれ、此函にシロチーミ沢とある次の
沢がニナルベツと呼はれてゐる。

ニナルベツ合流とせの中間位から沢は削け快いテレ
スにテントが張られるだろう。
二日目
一〇八七米の西方に小さな函があるだけで今日は
一日中容易に沢を歩く。

最後の水線二岐を越した附近が、最後のよいキャン
プ地である。
三日目
この日は野塚川えも豊似川えも乗越せる。野塚川
直下の沢をヒリ小さは滝をいくつぞこえて行くと滝
の三岐に出る。

石の桶の様にびつてゐる沢をはい上れば水は盡きお
花鳥になり、泊り場から四杆程で頂上につく。

十勝岳 (一四五七・二米)

樂古岳 (一四七二・二米)

地図 樂古岳

一般に登られる國境の山としては最南のものであ
る。山麓は日高側、十勝側共にかなり奥までよく開
けて居り、十勝側と樂古岳との間には川分けがある
。どの沢を歩いてき里から一日半か二日の行程で頂
上に達し得る。

西舎や新様似の村にぞお花鳥を見に登る人が居ると
云つ。
四、五日の軽い山歩きに十勝から日高へと越えてく
るのぞよいだろうし、更に北の野塚川まで縦走すれ
ばきつと楽しい一週向を送る事が出来よう。

登路

- 一、野塚川上樂古川—樂古川(或は札樂古川)—十勝
- 二、豊似—新様似—メアシユンヤツ川—十勝—樂古

古岳

十勝側の登路

「一」の登路

一日目

五尾線野塚又は五尾から上樂古に至り沢をつめる。いづれの沢をつめても更に容易である。たんたんたる河原の徒渉をくりかえすのみで、水線の切れるあたりで日を暮らす。

二日目

國境に向つて沢をつめれば、いづれを半日で尾根に出られる。十勝岳と樂古岳の向には、刈り分けがある。

野塚岳への尾根

高度は低いが、お花畑が多く歩き易い。十勝岳から野塚岳を一日半位である。

この他野塚川から来て二日程で十勝岳に達することが出来る。(野塚岳、野塚川よりのコース参照)

日高側の登路

メナシユンヤツ川は幌別川の支流中最も歩きよい

沢である。

十年前には樂古岳よりこの川の四〇〇米の二岐に降りてゐる尾根に道がついていた。現在は藪に埋もれて殆どわからぬ。

「二」の登路

一日目

日高線の終点標似より新標似を経て、自動車道路が二オヤツ合流から三軒程上流までついている。

ここから先は林道があり二オヤツ合流の次の水線三岐附近で終つてゐる。

初日はここに泊る事にならう。

二日目

二時間位で十勝岳からの標高尾根の作る二岐に出る。この丘の沢をつめれば、五時間程で十勝岳の頂上に達する。

樂古岳を刈り分けがあり、三時間にして達する事が出来る。

正 誤 表

頁及行	誤	正	頁及行	誤	正
1 2	自身	自信	12 下 17	沼伴	沼畔
9	一に一	一の一	18	三四	三四日
	一九月	一六月	13 上 13	管主別川上流	—— 合流
2 4	ピハイロ	ピバイロ	下 6	流は	宋は
7	孤任ウケカウシ岳	—— 山	14 下 18	申州	申洲
3 上 1	1753.7	1753.7 米	16 上 15	合流より時間	合流より二時
17	測量隊に	—— の		半	間半
下 10	北東側	—— に	下 12	カールワント	カールバルト
11	川口	川岸	17 上 6	イトンチツブ	イトンナツブ
4 下 4	千露呂	千露露	18 下 6	コイカク	コイカクシユ
5 下 7	其の	其の他の	19 上 2	碓嶽	碓嶺
16	自身	自信	上 16	六〇の沢	六の沢
6 上 12	呂冠	占冠	下 4	中札川	中札内川
下 16	上半	上手	下 6	石岸の石	石岸の道
7 上 6	砂州	砂洲	下 7	スマリンネ	ズマクンネ
14			20 上 1	合流は附近	合流附近
下 2	西側	西側	下 2	急は沢	急は小沢
19	戸篤別山	—— 岳	下 16	二つのそのを	二つのそのか
8 下 2	戸篤別との	戸篤別岳との		合わせにその	合さつたその
11	戸篤別川	戸篤別岳	で	で	で
18	千露呂	千露露	21 上 3	メナワツカ岳	メナワツカ岳
9 上 12	千	千	の	の	の
下 18	信舎	信泊	上 17	カシュツオコ	カシコツオマ
10 上 7	たやする	たやすく	ナイ	ナイ	ナイ
11 上 5	千露呂	千露露	上 18	コイボリ	コイボク
上 20	かし	ガレ	下 17	イゲツ川	イゲツ沢
下 2	かし	ガレ	下 18	イゲツ川	イゲツ沢
下 11	額平山	額平川	23 下 4	流はの	沢の
12 上 6	千露呂	千露露	下 12	南面に	頂上より南西に
下 9	隠みさ	隠みさ	下 18	左の本流	石の本流

頁及行	誤	正	頁及行	誤	正
	下 19 右岩	右岸	下 8	向つて石の	向つて一番丘の
25	下 4 ピクカバタ又	ピリカバタ又	53	上 16 カツシビチヤリ	カシビチヤリ
	下 14 札内側	札内川	下 3	大きな沢	大きな函
27	上 16 オビワネツス	オピリネツス	54	下 17 二百米と入ると	二百米も入ると
31	上 14 平目な	平坦な	55	下 5 サウシビチヤリ	カシビチヤリ
35	上 7 春別川	シュンハツ川	下 15	針山	鉾山
	上 14 春別川	シュンハツ川	59	上 20 ワソエマツ岳	ソエマツ岳
	下 1 濁岩分岐点	濁岩岳分岐点	下 3	ソエマツ岳	ソエマツ沢
	下 8 カムイエウシ	カムイウチカウシ	61	下 15 ピクカヌフリ	ピリカヌフリ
	下 12 セニの米	セニの米	62	上 17 直接に	直接に
34	下 9 四つ程窟	四つ程滝	63	上 4 ソエマツ沢を	ソエマツ沢と
35	上 13 セつの沢	セの沢	下 8	少々楽む	少々く楽む
36	上 2 北の最低	比の最低	66	上 1 ヒリカヌフリ	ピリカヌフリ
	下 14 札内川のうち	札内川の内	67	上 2 八四の米岐	八四の米二岐
	下 20 札内岳	札内川	68	上 15 約四時	約四時間
37	下 13 千米	千米	70	上 10 ソガベツ河	ソガベツ沢
38	下 10 一部	一部分	71	上 4 道に入れば	沢に入れば
38	下 19 ぐ詳しくは北大山岳	以下二十一号	上 20	はい上れば水	はい上れば水
	20 都報執号参照され	省略		は	ぐに水は
			72	上 11 楽門岳	楽古岳
41	上 12 約四時間	約五時間	下 3	水線三岐	水線二岐
	上 21 小さな滝	小さな滝			
	下 7 流水	流水			
44	上 7 何人かを	何日かを			
48	下 10 まいて行く(と広い	まいて行く(と(一時除			
		りて)広い			
50	上 9 甲の中の方	中の川の方			
51	上 12 中の川の記号	中の川の箇の記号			
	上 14 コルジュ状	ゴルジュ状			
	上 21 両は追つて	両岸は追つて			

昭和二十九年六月 日印刷
昭和二十九年六月 日発行
編纂兼発行人 岡本丈夫
西 信博
発行所 札幌市北八条西五丁目
北海道大学山岳部



